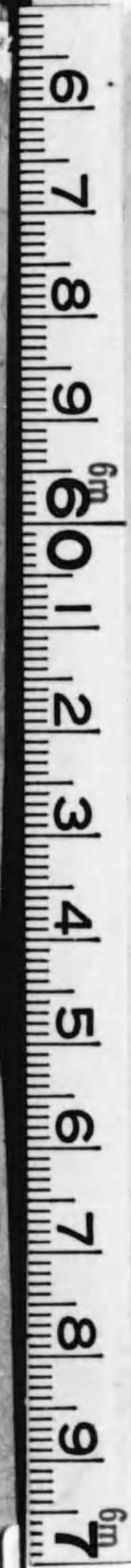


329

108

曾我兄弟

始



特232
796

弟 兄 我 曾

發行所寄贈本

著里鶯林小
版出社藝文



發行所寄贈本

はしがき

曾我祐成は河津祐泰の子、一萬と稱し、父が工藤祐經に殺され
母は曾我祐信に再嫁した、因つて曾我氏を名乗る。建久四年五
月、頼朝の富士野に獵せし時、弟時致と共に祐經を殺して其の
讐を報じ、仁田忠常に殺された、年二十二歳。
曾我時致は祐成の弟、宮王と稱し、建久四年、兄と共に祐經を
殺し、捕へられて斬らる、年二十歳。
以上を小説化したのが本書である。

著者 しろす

大好评の大众文學

小林鶯里 得意の歴史小説

高	赤	日	武	眞	豊	會	基	新	大	釋
山	穂	蓮	田	田	臣	我	督	田	楠	迦
彦	義	の	信	の	秀	兄	の	義	の	の
九	士	生	玄	智	吉	弟	一	貞	公	生
郎	涯	涯	謀	謀	吉	弟	生	貞	公	活
定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定
送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送
價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價
料	料	料	料	料	料	料	料	料	料	料
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
八	三	三	二	三	五	二	二	二	三	五
〇	〇	〇	八	〇	〇	八	八	八	八	〇

文藝社

内容

戀の争ひ	濫	一	戀の人	充
血縁の争ひ	五	浅間の狩くら	七	七
祐經の詭計	九	情の重忠	六	六
奥野の露	三	兄弟と景秀	三	三
無残の双	七	義盛の同情	八	八
由比ヶ濱の紅涙	二	敵の姿	九	九
佛門の箱王	五	圖らざる者左右	七	七
異常の稚兒	元	伯母の涙	三	三
赤木柄の短刀	三	卑怯の興一	六	六
箱王の決意	七	馬上の痴言	〇	〇
元服の祝ひ	四	隠されたる他人情	五	五
母の勘氣	四	五郎の情事	九	九
兄弟の加擔人	五	祐成を思ふ虎の心	三	三
小次郎の無情	五	和田一門の酒宴	六	六
虎御前と十郎祐成	充	不測の災	三	三
兄を思ふ弟の心	六	十郎義盛の對面	三	三

戀の盃	二四	悲憤の涙	二八
夕日の太刀影	二五	十八年の天津風	三三
草摺引き	二六	闇に光る太刀の跡	三三
想思の二人	二七	雨に色増す唐紅	三三
初めて明かす大事	二八	雨々の太刀	三四
名残の一夜	二九	裾野の嵐	三四
涙の訣別	三〇	嗚呼兄弟	三五
小袖乞ひ	三一	孝子の最後	三五
母の許し	三二		
別れの一曲	三三		
最後の首途	三四		
箱根の暇乞ひ	三五		
不運の兄弟	三六		
敵の屋形	三七		
亂れ舞	三八		
祐經の悪	三九		
紋ぢらし	四〇		
五月雨の夜	四一		

曾我兄弟

小林鶯里

(一) 觴 盞

『十八年の天津風』と冒頭まづ聞くからに、會心の笑みの上るやうな形容詞を有する曾我の復讐美談は、俗に、一に富士、二に鷹の羽の打つ交ひ、三に上野で花ぞ咲かせる、といふ、その第一位に推されてあるところからしても、如何に人口に膾炙して居る物語であるかゞ解る。

そも此の復讐たるや、伊豆の國の住人、伊東次郎祐親なるもの、孫、曾我十郎祐成、同じく五郎時致の二人の兄弟が、時の將軍頼朝の陣内をも憚らず、不俱戴

天の仇敵たる一家の輩、工藤左衛門祐經を討ち取つて、藝を戰場に施し、名を後代に留めたといふのにある。茲に伊豆の國は、伊東、河津、宇佐美——この三ヶ所を總ねて、苗美の莊と號す——その領主に、工藤大夫祐隆入道寂心といふものがあつた、多くの子を持つたが、不幸にしてみな早世し、遺跡既に絶えんとしたので、繼娘の子をとつて、嫡子に立て、伊東を譲り、武者所にまゐらせて、工藤武者祐繼と名乗らせた。然るに嫡孫一人あつたので、是をば祐繼の次子といふことにして、河津の莊を與へて、河津の二郎祐親と名乗らせた。

斯くて工藤大夫祐隆の家も、幸に跡を斷つゝの憂ひがなくなつたが、幾ばくもなくして、入道寂心即ち大夫祐隆が逝去したところ、一場の紛議が起つた。祐親は、我れこそ伊東家の嫡々であるから、嫡子としての譲あるべきであるのに、何ぞや異姓他人の繼娘の子たる祐繼が、この家に入つて相續するとは、近頃もつて甚だ聞えぬところである、と思ふから何うにかして自分伊東の家の主たらんと、

度々祐繼と對決したが、如何せん相手には讓狀といふ利器がある、祐親の望みは容易に達せられない、獨り悶々の裡に日を送りつゝあつた。

然るに幸か不幸か、當の相手たる伊東武者祐繼が、不圖したことから藥餌に親しむの身となつて、所詮快復は覺束ないといふことになつた。一日、其の子金石を枕邊に呼び寄せて、

『父の死後は偏に河津次郎祐親殿に頼るやう、其方十五歳と相成らば、祐親殿が女、萬却御前を妻として、當莊の本券、小松殿の見參に入れ、此の所を知行せよ、祐親殿心して其方の後見をなし下さるゝの情ある御言葉なれば、ゆめ疎に思ふことなく、叔父上をば眞の親と頼むやう、心を置きて禮に缺くるやうのことあつては相成らぬぞよ、此の伊東の地券文書、其方に直に取らすべきではあれど、いまだ年幼なの其方ゆえ、母に預け置く、十五歳に相成つたらば取り受けよ……』

と、細々言ひ残して、四十三歳を一期に相果てた。

斯くて祐親は河津の館を出で、伊東の家に入り變り、心やすき乳母をば金石につけて養育する。越えて金石十五歳の春、吉日を撰んで元服をさせ、名も南美の工藤祐經と名乗らせた上、女萬劫御前を是に配して、祐繼臨終の言に従うた。しかしながら、昔年の宿望に猶變ることなく、如何にもして此の思ひを果さんと心中ひそかに心して居つたとは、知るによしない金石の祐經、其の年の秋、落ち散る紅葉に送られつゝも、祐親と相具して上洛し、小松殿の見參に入つた。

祐親は祐經を京都に留め置いて、自分はそのまゝ伊豆の國へと立ち歸る、後に残つた祐經は、誰れ教ふるとても無きに、終日公文所を離れるやうなことなく、奉行所におきて身をうたせ、沙汰になれるほどに、善悪正邪を不審して、分別するに理非の明あきらか、諸事に心を亘して、手跡も普通に優れ、和歌は勿論、漢詩管絃の道にも心をかけて、もんでうの筵に推參し、その衆に列ること數を重ぬ

るに至つたので、工藤の優男よ、祐經の優男よと、小松殿の御覚えもめでたく田舎侍ひよ似氣なき風雅の士よと、人々にもてはやされるの身となつた。それかあらぬか祐經は早くも年二十一歳にして、既に武者所の一薦を経て、工藤一薦と召されて居つた。

(二) 血縁の争ひ

さるほどに祐經上洛して十年、宮仕懈らず勤め居つたる所、伊豆の國に罷りある母親が病死をしたといふこと、並びに亡父祐繼が預け置いたる讓狀を受けて伊豆の伊東に祖父入道寂心より、父伊東武者祐繼まで三代相傳の所領なるを承知したので、流石に叔父祐親が心のまゝにそれを取り計らひ居るのを見て、不快やるに處なく、此の旨官に訴へる、その申狀に、

伊豆の國の住人、伊東の工藤一薦平の祐經謹んで言上

早く御裁許を蒙らんと欲する仔細の事、右伴の條、祖父南美入道寂心死去の後親父伊東武者祐繼、その舍弟祐親、兄弟の仲不和なるに依つて、對決度々に及ぶといへども、祐繼當腹寵愛たるによつて、安堵の御下文を賜はつて、既に數ヶ年を経畢んぬ、こゝに祐繼一期限の病の床に臨む刻、河津次郎日頃の意趣を忘れ、忽ちに訪ひ來る、その時祐繼は生年九歳なりき、叔父河津次郎に地券文書母ともに預けおきて、八ヶ年の春秋を送る、親方にあらずんば、伺候の臣と申すべきや、所詮世のげいに任せ、伊東次郎に賜るべきか、また祐繼に賜るべきか、相傳の道理について、けんぼうの詔裁を仰がんと欲す、仍つて誠恐誠惶言上如件

仁安二年三月 日

平 祐 經

と書いてさへげた。

公事所に於ても早速人々寄り合うて、内談評定した結果、双方互に一家一門の間柄、ましてや祐親幾分の非理あればとて、祐繼は其の恩によつて養はれたるもの、血で血を洗ふが如きは爲すに忍びざるどころである。是は宜しく伊東の所領を二つにして、一つは祐親、一つは祐繼、兩人に相分ちたらんには若かじといふことになつた。

然るに祐繼は、十五歳より當所來つて、日夜朝暮、宮仕をいたして今に八ヶ年、なれども重ねては御恩を蒙るまじ、先祖の所領を二分して、その一半を祐親に召さるゝとは、そも何事ぞ、水上濁れるときは清からんことを思ひ、形の歪める時は、影のすなほならんことを思ふと、かたに見えて居る、父祐繼が代には、よも斯様には分けまいものを、今に及んでなんぞ斯かる處決に甘んじて居られやうや、こは偏に親方ながら、伊東がいたす所からのことである、無念殘念の至極よ、と思ひ怨んでは早その地に居るも何となく物厭はしい、竊に京を抜け出で、

駿河の國は高橋といふ所まで下つて来る。此所には木津川、船越、萩野、さては蒲原、入江などいふ親しきものゝある所から、二百餘人のものどもを驅り、催して伊豆なる祐親を一擧に刃下の鏽となしたうへ、彼の地の所領を我れ一人して進退せしめんものと、今は理非の明もあらばこそ、叔父たり、養父たり、舅たる鳥帽子親の祐親が館を指してひた寄せに押し寄せる、

と聞き知つたる此方は伊東の次郎祐親「片腹痛き祐經奴が振舞よな、さあらば我れにも爲んやうありと、時を移さず」と、嫡子の河津三郎祐泰を始め、次男の伊東九郎祐清以下一門の老少を呼び集めて、用意をさく／＼怠りなく備を固める。祐經力及ばぬを知つてか再び京に立ち戻る、祐親は此度の祐經が振舞を大に怒つて、さきに祐經に遣はしてあつた女の萬劫御前を取り返して、相模の人士肥次郎實平が嫡子、彌太郎遠平に娶はして了ふ。さ、事が斯く曲つて來ると、祐經の怨みはますます深くなつて行くばかり、加ふるに京に於けるその身の位置は不

首尾になる、伊豆の所領は全然祐親の手に歸して了ふ、眞に立つ目のない破目となつたので、今更何ぞ問の悪い……と愚痴をこぼしてみても追付かない、如何にもして此の怨みをば一分たりとも彼れ祐親が身に思ひ晴さんと、家臣の八幡三郎行氏、大見小藤太成家の兩人と喋し合せたうへ、矢一つにてもよし射つけて呉れんものをと、竊に來るべき機會をうかゞひ居る。

(三) 祐經の詭計

此方はそれと夢にも知らぬ伊東の次郎祐親は、先づ頃祐經と確執あつたその際に、武藏相模一圓の人々が、いち早くも己れに味方して伊東が備へを固め呉れし事あるによつて、何かな其の心盡しに報いんこともがなと思ひを回らした末、時しも秋の末つ方初冬の季節なるを幸ひ、深山がくれの鳥といはず、獸といはず、狩せんこそ何よりの興ある遊びならんずらめと、それ／＼への招待文を出す。茲

に於て三浦、鎌倉、土肥次郎、岡崎、本間、澁谷、糟谷、松田、土屋、さては曾我の人々など、思ひ／＼に伊東をさして出で立つほどに、遅れじものをと大場の平太景義、同じく舍弟三郎景親、股野五郎景久、名越の十郎、山浦瀧口太郎、同じく三郎、海老名の源八、萩野五郎、竹の下の孫八、相澤彌五郎、吉川、船越、入江などの面々、是れ亦同じく北條の四郎、同苗三郎、天野藤内、狩野藤五を始めとして宗徒の人々五百有餘人、擧つて伊東が館へと寄り集ふ、南美の莊の老若その數約三千四百五人といふもの、領主の命に従つて我も／＼と立ち出で、勢子の役目をつとめる、斯かるところに機會あれかしとこそ待ち設け居つたる祐經が二人の郎黨、大見、八幡、

「是れぞ屈強の好時機、此の機を外しては當の相手を狙ひ打たんこと、又と他に
あるべきかは……」

とばかり、各々柿色地の直垂に、鹿箭さしたる竹箆を取つてつけ、白木の弓の射

よげなるをうちかたげ、勢子の一群にまぎれ入る、狙ふどころ、打たんところは
そも何處？

一日目には柏が峠、熊倉が谷、二日目には萩が窪、椎が澤、三日目には長倉が渡り、朽木が澤、赤澤が峯と、根笹熊笹ふみ分けて、山から谷へ、谷から山へと凡そ七日が間といふもの、附けつ廻しつ祐親父子を打たんとしたが、さては伊東は國一番の大名で、家臣郎黨數多く、前後左右に附き従ひ居るがために、兩人打つこと能はず空しく日を送るのみであつた。

さるほどに追ひ立て狩り立てつして、取つた獲物も、積んで山となつたるほどに一同の面々、勢子を集めて、獲物々々の自慢話に時を移しながら、茲に一先づ山を退くことゝなる。

『さては無念よな、斯くまで心を盡せし甲斐もなく、祐親父子打取らんこと相能はであつたるか……』

大見、八幡の兩人も流石にあぐんで見えたが

『此のまゝお主がもとに立ち歸らんも心憂し、さらば歸りのほどを狙うて見てこそ然るべきこともやあらう……』

と、疲れた足に岩角をば、喘ぎ／＼攀ち登り滑り下つて、豫て知つたる間道を走り抜けて、祐親父子の來るべきを待ち受ける、其所で奥野の口、赤澤山の麓、八幡山の境にある難所中の最難所、足場を計つて、傍への立樹を楯に取り、一の射翳には大見の小藤太、二の射翳には八幡の三郎、手だれものゝ兩人であるから、餘りはせじどうかゞひ潜んで待ち掛けた。

時は神無月の十日あまり、山めぐりのむら時雨が、降るとくもなくはらく／＼と降つては止み、止んでは降る山路の草を駒の蹄に踏み分け／＼手綱搔繰り靜かに打たせ來つた武者一騎、二騎、三騎、つゞいて十騎、二十騎とある其が中に、是は面白くも扮装つたれ、秋の野の摺り盡したる間々に、ひきかきしたる直垂、斑

の行臈裾たぶやかにきはきなして、鶴の本白で矧いだ白ごしらへの鹿矢を筈高に負ひなし、梅檀籐の弓の眞ん中輕やかに握りたもつて、萌黄うらつけたる竹笠をば吹き來る木枯に打ちそらせつゝ、寂月毛の馬の五寸あまり太く逞しくして尾髪あくまで縮んだるに、梨地に蒔いた白覆輪の鞍おかせ、連赤鞞の疑冬色なるをかけて、含轡に紺の手綱かい繰り／＼、進み來つた一人の武者がある。

(四) 奥野の露

……と、きつとばかりに目をつけた大見、八幡の兩人、一の射翳はそのまゝに二の射翳の前二段ほどまで引き寄せ置いて、大の尖矢打番ひざま、よつびき暫しかためて颯と放つ、矢は羽響たかく唸りを殘して、件の武者が鞍の後の山形射削り、行臈の着際から臍下を拓けて鞍の前へぞ突き立つ、不意の痛手にあつと驚いた武者は、それでも駒の頭を立て直すと見るより早く、弓どりのべて矢をつがへ

さまきつと四方を睨んで控えた、流石に大事の痛手に居堪らず、鞍壺はづれて眞逆様にぞ大地へ打伏す。

『それ山賊あり、先陣は返せ、後陣は進めつ』

と、人々の打ち騒ぐひまなく、又もや飛び來つた第二の尖り矢は、がつきとばかりに、續き進んだ伊東次郎祐親が左の中指射削つて、前のしほでに射て立つたり。

『曲者ツ、方々御油斷めさるなツ』

祐親、戰場々數の古強兵だけあつて、二の矢を敵に射させじと、早速に馬より飛び下つてそれを小楯に身を潜める、ばら／＼と後より前より、人々は集まる、大見、八幡の兩人は『仕損じたるか、ても河津の三郎は射てとめしよ』と、につこり笑みを洩して其場を逃げのびる、さきに二人の矢先に落馬したは、祐親が嫡子河津三郎祐泰であつた、父の祐親は、我が子の痛手に氣も半狂亂、己れが膝に祐泰を抱きのせて、

『傷は輕きぞ、大事はなきぞ』

と、勵ますれど、三郎祐泰身動きもせず、

『如何に三郎、こは何としたることぞ、たとへ定業なればとて、など矢一つにて物をもえ言はで、死することやある、敵は誰ぞ、言へ、言へ、覚えはなきか』

恩愛の聲は流石に瀕死の三郎祐泰が耳にも通じた。苦しき息の下よりものいふ聲音の其の細きこと、叢にすだく虫のそれにも及ばぬ、

『……敵は……祐經めどこそ覚えておざります……』

一言名残りに、あはれ奥野の露と消え失せる悲嘆の涙は伊東の一家を濕した。妻の満江は一萬、箱王の二子を抱いて

『共に夫と一つ道を……』

と狂ひ泣く、やがてはそれも暫し、茶毘一片の煙となつてあとはたゞ徒らに北邙の空しづ心なの鳥が悲しげに泣くのみとなる。

時日は無心に、明けぬ暮れぬを經つてゆく、愁ひの底に沈んだ満江は茲に宿世に如何なる縁あつてか、三郎戀し、夫戀し、其の涙の露をば袖にと包んで、再び相模の人、曾我の太郎祐信なる祐親が一族のもとに嫁入る、かつては坂東八ヶ國に猛者の名を恣にした河津三郎祐重が子も、かくては又昔日の面影はない、たゞ月に花に人しれぬ無念の涙を流しつゝ、敵工藤左衛門祐經が身を呪ひ居る。

さるほどに蛭が小島の流人たりし源家の嫡流頼朝は、權花一朝二十年の榮華に一門の幸を盡した平氏の大軍をば微塵になして、征夷大將軍追捕使となり、今は空行く鳥をも翼を疊んでその前に禮せしめ、水底くゞる魚をも鱗を藏めてその後に従はしむるの勢となつたので、關東一圓はいふもさら、日本全土を擧げて津々浦々に至るまで、威の及ばざるところ是れ一寸もなきに至る。昔は平氏の恩顧に俗せし工藤左衛門祐經、「忠臣は二君に仕へず」も、打物とつて海山の大恩ある祐親に刃向ふが如き鳥乎の不恥漢なれば、頭に積つた塵ほどにも思はず、頼朝兵

を起して勢盛ん、と聞くより早くその幕下に馳せ參じて、味噌をすること料理屋の料理人以上

心のまゝにすめる月かな

と言はれて

峯たかき松ふく風の音絶えて

と調子合して以來、お側去らずの勢力家となつた。

(五) 無 殘 の 刃

斯くてその反動として多くの敵は知らずくのうちに作り出された。ましてや先年大見、八幡の二人に命じて、河津の三郎祐泰をば、亡きものにした彼れ、流石に夜毎々々の枕も高うはして寝まれない、

「聞けば三郎祐泰が伴に一萬といひ、箱王といふ二人の男子があるよし、我れを

當の相手ともし知らば、必ずや成長の後に我が一命を狙ふは火を見るよりも明かなこと、しかし、今にしてその息の根を絶たんには』

と、あはれにも親戀し父ほしやに、或る時は雲井を高く飛ぶ雁に不覺の涙を流し或る時は隅なく牙ゆる月影に兄弟手に手を取つて父戀しと叫びつある祐重が忘れがたみの一萬箱王をば、根なし草の事よせて、一つは籬に朝顔縫うたる練貫の小袖に、精好の大口顯紋紗の直垂、一つは血汐の色の楓葉に鹿かきたる紅梅の小袖に、わざと大口ばかり著せたるを、風冷やかに浪白き、由比が濱邊に引き出して首打たんとこそはしたのである。

『世に歎き深きもの數あればとて、我等ほどのものはおざるまい、祐信、幼きもの二人もつておざつたが、五歳、三歳にて失ひ申し、その思ひ未だ晴れやらぬうちに、又も妻に後れておざつた悲しさ辛さ、一方ならぬ思ひの淺からぬに、彼等一萬、箱王が母も、河津の三郎祐泰に先立たれて、二人の子を持ち涙に日

を送り居るよう聞き及び、人の嘆きも我等が思ひも同じこと、さらばかたみに語り慰めんと存じて幸ひ伊東とも親しうおざつたにより、迎へ取つて今はこれ此の者どもが十一、九歳、人一倍の健氣な二人でおざるほどに、我等なんぼう愛しうおざらうて、お察し下されい……なれど今はそれも能ひ申さぬ、さても子に縁なきものは、人の子をも幸ひせぬものにておさいませうか、弓矢とる身が此の涙、御推察下されい』

涙を袖に祐信が、いとし不憐と二人が命乞ひをしたが無残やな、上意の一語に取つく島もなくく、ともく、由比が浦曲に従ひゆく二人は端然と設けられたる席につく、太刀取りは土肥の彌太郎、檢視役目は梶原平三景時、無念の浪も兄弟のあはれに、悲鳴するかと聞きなされる、松ふく濱の嵐も二人の不幸に、咽び泣くかと感じられる。

やさしくも兄弟が閉じた観念の眼は、それとも動かぬ。

『其方たち如何なる過ぐ世の報にか、乳のうちにして父に後れ、重代の所領にははなれ、命だにも十五、十三にさへ、えならずして、今また切らるゝことのもさも哀れさよ、祐信も其方たちに後れて、千歳を経るべきかは、髻切つて後世を懇に弔ひやるほどに、よし今世の宿縁薄からうとも、來世は必ず一つ蓮に生れ合ふであらうぞよ、さるにしても母が方に、それと思ひ置くことはなきかあらば遠慮なう申し述べよ、祐信身にかへて、望み届け得さするほどに……』
 涙は止めあえぬまでに祐信の頬を流れる、並みあるもの一人として眼を瞬たかぬものはない、義父の情ある言葉に、やをら涼しき瞳を見張つた兄の一萬は
 『祖父御の御事により、我等幼うござりますれど免されて斬られんこと、力に及ばでござりまする、さりながら義父上の御恩、死すともゆめ忘れ得申しは仕らぬ、御髻切り給ふこと、くれぐれも御止まり遊ばさるゝやう、我等臨終の御願ひにござりまする、たゞぐ、兄弟二人斯く相成つたる上は、母御の御嘆き

嗚やと思ひ察せられて……』
 流石に聲は雲つて、熱き涙の滴は、はらくと膝に玉と散る。

(六) 由比ヶ濱の紅涙

『……朝に夕に、母御が御心を御慰め下さりまするやう、たゞそれのみでござりまする……』
 『理ぢや、母が身の上は、必ず此の祐信が心して慰め遣はすほどに、ゆめ懸念なう冥府へ行きや……今更聞き始めたことにはなけれど、弓矢とる家に生れしものは、命よりも名を惜むものぞとや、其方たち、たとへ骨身は野山に埋むとも、名をば雲井に残せよとは、豫て聞き置けることにてあらうほごに、見苦しき最後はいたすなよ、心を亂さず眼を塞ぎ、手を合せて阿彌陀如來助けてたべと深う祈念するものぞ』

『なれど、のう義父上、……如何に祈ればとて、所詮は助かる命にてもおざりませぬものを祈ればとて、頼めばとて……』
幼な心にも、重なる身の不幸は、遂に神をも怨むに至つたのであらうか、一句人の肺腑を抄る。

『その助けにてはなきぞ、其方たちの父の一所に迎へ取り給ふべき誓願の助をこそ、必ず頼まれいと申すなるぞ』
押返して祐信いふ、一萬、箱王、聞くより共に莞爾として

『そのことなれば申さるゝまでにもおざりませぬ、故郷出づるその時より、疾くに思ひ定めつることにておざりますれば、なに、心を残し申すでおざりませうや、亡き父に遇ひ奉ると思へば、限りなう嬉しく覺えまする』
答ふる聲の下には、定めし戀ひしくの父の面影、幻ともなつて現はれたことにてあらうも知れぬ、兄弟は西に向つて手を合せる。

『南無……』

と念ずる聲は、浪の寄せ間に悲しくも人々の耳を打つ、土肥の彌太郎が腰からは一閃、三尺の大刀が稻妻と光る、見るに得たへじ瞑目して居つた義父の祐信は、兄弟が念ずる聲音につと眼を開く、見れば彌太郎が手には既に三尺の秋水が振り翳されてある。

『待てッ』

事は我にもあらで口を衝く、咄嗟、轉ぶが如くに土肥に縋り寄つた祐信は、わななく口元に、

『土肥殿、然るべくは打物を、拙者に御預けあれ、我等が手に掛けて、彼等が後世を弔ひ申さんほどに……』

義父として子を斬る、何等悲惨の極みであらうぞ。
合掌して頸をつと差出しゐる二人は、絶えてそれとも動かぬ、海面渡る濱千鳥

の一羽、二羽、チクと鳴いて磯邊をかすめ行く、振りかぶつた太刀の下には。一萬の雪のやうな頸が、やさしくも眼にしみる、幾度か打ち下さんと心を取り直しながらも、猶恩愛の絆は断ちもならで、祐信、その場に撞と打ち伏して、聲をも惜しまずよよと泣く、情に飲けた梶原も、流石にあはれを感じたか。

「祐信殿、暫く御待ち召されよ、拙者一ばし申して、兩人が命乞ひ、君に御願ひいたして見申さん」

ひた走りにその場を立ち去る。

斯くて平三景時、頼朝の館に伺候して、口を極めて一萬、箱王の助命を乞ふ、容易に聞き入れられぬ、折柄畠山庄司重忠も共々助命の沙汰を願ふ、斯くても猶聞き届けられぬ、今は詮方なく、館をさがらんとしたが、今一度口の限りを盡して、兄弟が命を乞うて見んものと、景時、重忠、相共に頼朝を責めてその沙汰を促がし見る、幸に二人の誠、相通じたものか、漸くにして此の状聞き入れ

られる、重忠、景時等大いに嬉んで、直ぐ様右の次第を祐信にしらせる、曾我一家の喜びは、まこと、手の舞ひ足の踏む所を知らざるばかり、一萬、箱王、二人の玉の緒は僅かに是等人々に依つて、始めてつなぎ留めえられることが出来たのである。

(七) 佛門の箱王

さるほどに兄弟、助命の沙汰あつてより、光陰惜しむべし、時人を待たざるのこどわり、ひまゆく駒の足はやく、つながぬ月日も重ね重りて、茲に一萬は十三歳となる、身の不祥なるにつけても、また公方を憚ることであるによつて、竊に元服して義父曾我の太郎祐信の苗字を取り、曾我十郎祐成と名乗る。弟の箱王は此の時十一歳、一日母の膝下に呼ばれて

「其方、既に十一歳とも相成られたれば、此の母が申す状、大凡は解りめさるゝ

であらう、近く箱根の別當が許へ行き、法師となつて學問し、親の後世をばどぶらひめされよ、ゆめ男うらやましと思ふが如きことなく、世をのがるゝの身なれば、よし綾羅錦繡の袖ありとも、苔の衣と觀じたまへ、十善の帝王たりとも、身を捨てたらんには人に對するに所はおざりませぬ、憂しといひ辛しといふ、その世の中とても、たゞ一場の夢、傳へ聞く大目連尊者は、その昔母御が御教へ給はれし言の葉をば、ついぞ忘るゝことなく、よく耳の御底に保ちめされたればこそ、五百の大阿羅漢の上にも立ち給ひしとか、かまへ法師となられ父の跡をも母が後世をも助けたまはれよ』

と懇ろに言ひ聞けられる。

箱王とても身に思ふ筋あるに依つて、世を捨て人の法師ばらとなつて一生を過さんことごとより本意ではない、しかし母が一圖に望まるゝ所、それをいげに却けんも、あまりに心な業と思へば、たゞ

『承はつておどりまする』

とのみ、母も大きに喜ぶ、茲に箱王は生年十一歳にして、箱根の別當が許へ上せられ、空しき年月を送るほどに、はやくも十三歳となる、父戀し、敵憎しの思ひは、その間にも絶えず、小さき胸の裡を往き來して、片時たりとも忘るゝひまどてはなかつた。

一年の暮の如き、是も箱王と同宿の雅兒數あるうちに、親からの文、兄弟の文さては親しきものよりの文なんど、各々手にせぬものはなきに、獨り箱王のみは母の文ばかりに、からん装束添へて送られたきり、萬につけて父なき身の悲しくも寂しく又うらやましくてあはれ、母よりの文をば袂に入れて、さめく泣きしをれる人なき室の中、

『人はみな父母の文、親しき方の御文なりとて、數多く讀まれ給ふに、さても我れはたゞ母御が御文ばかり、父とやらへの御文は夢にもえ知らであることこの悲

しさよ、たとへ一言半句の御文なりとも、父方の御文ありつらんには、嘸や嬉しきものを……、戀ひしくも見たきものは、さても父上の御文よ……」

涙と共に掻口説く箱王が心は、いちらしくもあはれの極みであつた。

箱王、十三歳の春、謙倉殿數多の人々を引き具して、この正月十五日、箱根權現へ參詣のよし、人傳ながらに聞き知る、さては敵祐經奴も共に供に来るべしと胸躍らせ居る。

やがて當日は来る。供し來つた人々の中には、和田、畠山、川越、高坂、江戸豊島、玉の井、小山、宇都宮、山名、里見などの面々を始めとして、以上三百五十餘騎、花を織り紅葉を重ね、装束ども綺羅天を輝かすばかり、雲陣頭を覆うて水干、淨衣、白直垂、布衣、權勢あたりを拂ひ、行裝眞に目を驚かすの有様で、後陣警護の武士は皆一樣に甲冑をよそひ、弓箭を帶する隨兵は上下につがひ、左右の帶刀二行に並んで、御調度掛の人々また弓手馬手に相并ぶ、御迎への麗人は

伎樂を調へ、羅綾の袂を翻し、御前の舞人は鷄婁を撃つて、ふかうの踵をそばだてる、實に權勢を盡し、威儀を極めた見物である。

(八) 異常の稚兒

箱王は今日こそ、父の敵たる工藤祐經をば見知り置かんものをと、御座所の後に隠れ居て

「彼は何人であざる、これは何の誰にておざりまするか」

と、傍への老僧の袖を引いて問ひ尋ねる、此の老僧、鎌倉の案内者にて、大名小名の名よくも知り居るものであつたか、

「あれは秩父の重忠殿、これは三浦の義盛殿……」

と、或は里見の源太、或は豊島の冠者、或は梶原平三景時、或は宇都宮彌三郎と一々細かに指し示して教へる。

中に一人、半装束の珠數もつて、香の直垂きた立派やかなるが、悠然と席について居る。

「彼の人は何の誰人にはおはするか」

箱王何心なく問ひ尋ねる。

「彼の人こそ御分たちの一門、伊東の主、工藤左衛門祐經殿でおさる、御分の御父河津殿とは、御從弟の間柄にて、今、鎌倉殿に時めき給ふ御方でおさる」

聞くより箱王飛び立つばかり、きつと瞳を定めて見るほどに、さても憎や、不倶戴天の父の仇は微笑を含んで座につけること悠然、箱王、うちさはぐ胸の思ひを秘して、さあらぬ體に

『さて、良き男前でおさるよ、年の頃三十三にも打見えておさりまするが、我等の父に似て居らるゝところ、おさりまするか』
と聞く、

『いや、少しも似たるところおざりませぬ、まさしき兄弟にあつてさへ、似たる人としては少きもの、まして從弟の御間柄なれば、さも似たるところおざりませぬ、年の頃こそ、河津殿の討たれ給ひしほどなれ、御分が御父祐泰殿は、彼の人よりも遙かに丈高く、骨太くして、前より見れば胸より後により見ればうつぶき、側より見れば四角なる大の男でおさつた、かて、加へて馬の上といひ、徒歩立といひ、御分が御父に並ぶもの、坂東八ヶ國廣しといへども、居らなんだであつた、殊に鹿狩の上手にて、力の強きこと無双の大力、かつては相撲の國の住人、大庭の三郎が弟、股野の五郎景久とやらん申す相撲上手を、伊豆の奥野の狩場にて、片手投げに打倒して、數度の勝を取られしとかさるを痛ましきは其の御最後こそ、右の狩場よりの御歸途でおがつたよ』

僧は無心に語り聞かせる、箱王の胸は千々に思ひ亂れる。
と、やがて僧をば其所に残して、箱王たゞ一人、日頃秘め置きし赤地の錦にて

柄鞘巻いたる守り刀をば、きつと内懐に握りしめつゝ、大衆の中を抜け出で、しのびやかに祐經が後近くへ狙ひ寄る。

悪盛んなれば天に勝つ、祐經しばしの冥加やあつたりけん、つと梶原三郎兵衛を隔て、見るともなしに後振向けば、輝く瞳に己れを見詰めて佇み居る一人の稚兒、さてもよくその面ざしの河津三郎に似たるものよ。

「聞けば、まこと、この御山には、伊東が孫のありとか、若しや此の稚兒にては………」

それと見れば見るほど、河津に生きうつし、眼光爛々として、つと引き結んだるその口元には、いふべからざる決心の色ほの見ゆる、流石に物凄しい。

(九) 赤木柄の短刀

「卒爾ながら、もの、御問ひ申す、伊東入道が孫、この御山に居らるゝよし聞き

及んでおぼるが、何處の坊におはすでおぼらうか、御存じあらば御教へ下され

折柄通り過ぎんとする一僧に問ひたす。

「伊東殿が御孫、箱王殿にておぼりまするか、それなれば、當別當の坊に居らせられまする」

「左様でおぼるか………」

祐經答へて後振返り見れば、猶件の稚兒は此方を見詰めて立つて居る。「もしや、あれなる稚兒が、その箱王殿とやらん申す、伊東が孫にてはおぼるま

いか、如何でおぼらう」
「いれは………」
指さした彼方には、松と藤とを縫ひ合した長絹の直垂に、萌鹿糸で菊綴したるを著た箱王が佇み居る。

『……如何にもあの稚兒こそ箱王殿でおざりまする』
僧の言葉に、

『なんぞ……』

と祐經、箱王を手元へ招き寄せる。

箱王も願ふ所と喜んで、祐經が膝元ちかく寄り進む。

祐經、その肩をば左手におさへて、右手に箱王が髪をかきなでつゝ、

『天晴れ、父御に似たまひしよな、さるにしても今まで相見ざりつることの口惜しき、斯く申す工藤祐經、まこと本意なら覺えておざる、承れば和殿の兄者人一萬こと、今は立派やかなる男と成られしよし、祐經蔭ながら喜ばしう存じておざる、御義父祐信殿、及び母御満江殿にも、その後は些の御變りもなくあらせられておざるか、久しく御見も得でおされば如何かと存じて懸念にえ堪へ申さぬ、斯く目のあたり和殿を見たてまつりては、流石に昔のほど思ひ出でら

れて、今更御父河津殿のことも憫ばれ人しれの憐れを覺えておざる、急ぎ法師となつて別當につきたまへ、弟子多しとは言へ、拙者ほどの加擔人持つたる人は、よも他にあるまじと存ずる、便宜を以つて上様へも宜きやうに申し、師門の訴訟あらば、必ず申し立つるでおざらうほどに、今後は如何なる大事なりとも、心をきなく仰せ聞けられよ、祐經かなへ奉るでおざらう、この事、和殿の兄者人にも、御申し傳へたまはれ、父御にも添はで日を送らるゝこと、いかにか便なうおはさんと、祐經ふかく御察し申すでおざる、行跡乗馬などの御用あらば、早々申し聞けられよ、拙者かならずともに、御用うけたまはるでおざらう、身貧にして他人に交らんよりは、親しき身内の祐經、随分心をきなく御訪ひめされ、それにつけても始めての見參に何がな引出物をと存ずるが、突然のことして意にまかせず、と申して引出物はなしからんも何となう無念におざれば、せめては是なりとも參らせん』

言ひつゝ懐中より、赤木の柄に胴金いたる小さ刀一振り取り出して、箱王にと
 らせる、言葉の切れ目くくに、たゞ承る節々にのみ答へ居つた箱王、此のまど
 くしき敵の物語を聞くさへあるに、今また引出物にと一刀を贈られたので、
 『己れッ』

と、一度は心を決したが……

無念、祐經の用意は、なか／＼に殿しい、右手に其の一刀を握つた箱王の手を
 持ち添へて、左手に軽く頭を撫でながらも、其の眼光を絶えず、箱王が心の裡を
 讀むに怠らぬ、箱王、いかに機をうかがへばとて、何條、敵の祐經に些の油断や
 ある、いざといはゞ、其のま／＼と一拉ぎに取り拉がんずる其の氣色は、あり
 く／＼眉宇の間にあらはれてゐる、生ぐいに事を爲出さば、却つて其の身の破滅を
 來すは、火を見るよりも明かである、箱王、今はたゞ敵のなすがまゝに、萬斛の
 怨を呑んで、ひた静まりにしづまりゐるのみ。

(十) 箱王の決意

斯くともみた祐經は、やがてのことに

『さて／＼思ひのほかなる今日の見參、拙者望外の満足をいたしておさる、なる
 ことならば、此の所に於て緩々ど、御話し申したうはおざれど、君の御用にま
 、ならぬ身の祐經、本意なき次第ながら、是にて御別れいたすでおざらう、里
 下りの御序では、必ず兄者人と御同道、拙者方へ御入りあれ、祐經、日を數
 へて御待ちいたし居るでおざらう……』

と一言残して其の場を立ち去る。

現在、目の前に父の敵をさしをきながら、討ちもえせで、みす／＼逸し去つた
 箱王が口惜しさは、此の時そも如何ばかり。

『さあれ、今の場合こそ力及ばず、大事を思止つたれ、やはか此の敵のがして

なるべき……かじ、此宵をまつて思ひを晴らさんには……」

隙こそあれと箱王、血眼になつて祐經の後を窺ひつあつたが、流石、相手は當時鎌倉殿の権臣、近寄らん術とては絶えてない。

無念残念と思ひ續くるうちに、月影すでに朧となつて、夜は明ける。

箱王、如何に心を盡せばとて、今は施さんにも施す術がない、空しく警固の士數多に取り圍まれて、静々と立ち去りゆくなる祐經が後を見送り居る。

昔は、松浦佐保姫、雲井の船を見送つて石と化したとか、今に言ひ傳へが残つてはをれど、それにもました箱王が其の時の心のうちは、思ひやるだに哀れの極みである。斯くて箱王、今は僧とならん志も失せて、經誦す口に

『敵うたせてよ、父の仇報いさせてよ』

と、只管神かけて祈る、かたはら、暇あるごとに山深く分け入つては、立木を相手に劍もつ術を磨き、四邊の大石を動かして力業を試むるなど、ひとり仇討つ事

にのみ汲々として、また余念もない。

一年、二年は夢の如くに経過する、

箱王、とつて茲に年十七、一日、師の坊の行實が許にまねかれて、剃髪の命を受ける、異存あればとて流石ありとも言へず。

『御仰せのほど、かしこまつておざります』

と、心ならずもうけがふ、乃ち大衆に

『箱王、剃髪』

の由を觸れ示す。

しかしながら箱王ひとり心中に思ふやう、

『法師となつて、父の菩提を弔ひ奉らんことは、豫て母上の御志である、とはいへ祐經を討つて、父の妄執を霽らし參らせんこそ、箱王が生涯の望みである、母上の御志よ、もとより背き難きものにては相違なけれども、箱王

が望みとても、また捨て難きものである、僧となつて祜經が一命をゆるさんか
 はた又母が命に背いて父の怨みを霽さんか、思は二つ、身は一つ、さても浮世
 とは自由ならぬものよ』

千々に心を碎いたが、さりとてよき思案も胸に浮ばぬ、時日は徒らに經つてゆく
 いよいよ明日は、髪をおろすべく定められた當日となる。

『兄や来る、母上や來ます』

相見んことの流石は心嬉しく感じつゝも、兄や來らん、母上やきまさん其の時は
 此の胸のある所、此の思のある所、一々披瀝して以て身に決し兼ねたる日頃の思
 案を定めんものと終日、待ち暮らしたが猶兄は見えぬ、母もきまさんぬ。

『……所詮は法師になりたりとも、時につけ、折にふれて、祜經を討ち捨てたく
 思ひつらんには、この事、却つて罪ふかゝるべきを如何せん、とてもものことに此
 所を抜け出で、曾我なる兄者人の智恵を借りしうへ、兎角の決心をつくるにしか
 立ち出でる。』

(十一) 元服の祝ひ

千年の松杉、鬱々として天を摩するあたり、萬年の臺巖、突几として道を扼す
 に、箱王の健脚これを馳驅し去つて、忽ち曾我の里へ下る。

『兄者人、十郎殿』

ホト／＼と門を叫く物音は、更け行く夜半の静けさを破つて、ひくいながらも十
 郎が耳に入る。

『誰ぞ、我が名を呼ぶは……』

人目をかねるが如く訪ふ様子に、十郎、そと闇を透かして見る。

「おゝ、御事は箱王……」

余りの意外に、十郎我れを忘れて、轉ぶが如くに走り出で、箱王を己が室にと招じ入る。兄弟、かたみに袖を別つてより、今に三年、久方の對面とて先立つものは、たゞ涙である。十郎、始めのうちは、夢か、幻かとはばかり我れと我が身に思ひ迷ふたが、やがてのことに

「如何なれば斯くは、夜更けに來られつる。師の坊とても、案じたまうものを……」

と、不審げに尋ねる。

「されば……山にあらんには、明日、法師となり申すほどに、ならぬ前にこそと今宵ひそかに抜け戻つておどろきする」

箱王が答ふる言葉に

「それよ、今日師の坊の許より御使者到來いたして、明日は御事も剃髪いたさるゝよし承知仕つておざるにより明早朝、實は登山いたしたる上、御事が模様を見申さんと存じ居つたところ、よくこそ、思ひもかけず、山を下り來られし

ことの嬉しさよ」

と十郎いふ

聞くより箱王

「嬉しさよとの仰せは、定めし豫ての事を思召されてさか、さるにしても、如何なれば登山して、箱王をば安堵させ給はざる、今宵まで御打ち捨て置き給ふこと、箱王、御怨みに存じまする、此の儘兄上の御左右を待ち居り申さば、必ず明日は髪を剃られ申すべきに、申し合せてこそ彼の大望、兎にも角にも、なり申すべき筈、今更、御思ひ捨て申されておどろきまするか、我等いつぞや、祐經の面見知り申してより、束の間も忘れしことおどろきませぬ、あらましのこと

叶はぬまでも仕るべければ、早々御返事のほど御聞け下されい』
と詰め寄る、

十郎答へて

『げに御事が申さるゝ通り、彼の大事は兩人申し合せてこそ、兎にも角にもなり申すべき筈、祐成なにとて思ひ捨つることおざらうや、さ申さる御事こそ、祐成が心を見んとて、斯くは物申さるゝにておざるか、御事に烏帽子を着せんとこそ思ひ煩へ、なにしに髪おろさるゝこと、祐成本望に思ひ申すべき……』
といふ、

箱王、聞きて嬉しげに

『我等もさこそあらめと心に存じたればこそ、斯くは山を抜け出で、立ち歸り申したれ、たゞ母上と師の坊との御本意に背き奉らんこと、是のみなんぼうか心苦しうおざるよ……』』

愁然として、流石の箱王も、首うなだれつゝほつと熱き吐息する。

『その事ならば祐成に任せてよ、如何やうにとも此の祐成が身に替へて、申し受くるでおざらうほどに、心安う思し召されよ、さるにしても元服は一生の大事、誰をか頼みて烏帽子親となりたまふ御心組ぞ、思ふに北條殿は鎌倉殿の爲めには舅御たれ、我等が父上には姉嬢の御間柄、此の人を頼みたらんには、定めし快う諾なひ下さらうと存じておざるが御事は如何思し召さるゝぞ』
慰めながら、勵ます如くに十郎いへば、

『たゞ〜然るべう御取計らひ下さりませ』

とのみ箱王答へる。

乃ち十郎、箱王を率て、其の夜のうちに、大磯道を鎌倉なる北條が館へど、ひそかに我が家を立ち出でる、時に建久元年十月中旬、祐成やがて北條の家につきて、此の旨を申入る。

當の主時政大いに喜んで

『よくこそ参られておざる、今の世の中に男と生れて、出家せられんこと、時政口惜しう存じておざつたに、さてもよくぞ來たられておざるぞ、身不肖ながら如何にも御分等が御望みに従ひまゐらするでおざらう、我れと我が身に發心せざるものを、なにしに法師となすの要やある、結句、其の業を遂げがたきは、いふまでもおざらぬ。男となられんこと、まこと、然るべきでおざる、幸ひ吉日の今日、これより直ちに然か取り計らひ申すでおざらう……』

と、即刻其の用意を整へて、元服の式を執り行ひ、時政自ら箱王の髪をあげて、曾我五郎時致とぞ名乗らす。

斯くて時政より、鹿毛なる駒のふとく五相逞しきに、黒覆輪の鞍置かせ、黒糸の腹巻一領添へて引かれ、七日の間祝ひの酒宴に日を送る。

(十二) 母の勤氣

此方は箱根の別當、箱王が曾我へ下つたとは夢にも知らざれば、夜明と共に、授戒の用意と箱王の室を訪ひ見る。中には閨の枕も衾も變らであつたが、主は搔暮れ行方が知れぬ。

『こは如何にしたるぞ』

打ち驚いて、いそぎ曾我の館へ人を遣して、箱王の所在を尋ねさす、箱王の姿は此所にも見えぬ。

それと知つた母満江も大いに驚いて、彼方此方と其の所在を尋ね搜すといへども箱王十郎二人の行方は、そことも見當らぬ。

母の心痛は一方でない、夜の眼もあはず明け暮れ兄弟の身の上を案じ居る。

越えて數日経つた或る一日、十郎、五郎の兩人は、時政よりの引出物を、送りの人々に持たせつゝ、さんざめかして歸り來る。

母は死したるものが、蘇生つたかのやう、

「十郎殿、箱王殿、ともくに見えられておざりまする』
 と人々の立ち騒ぎながら、告げ知らせるのももどかしげに、
 「疾くは是へ來よや、久しく見ざつたほどに、嘸かし大人びたことでおざらう
 よ、法師すがたは如何に……箱王が法師すがたは如何に……」
 相見んことの、そし暫時たれ、我が子戀しは親の常、まして是れを十一才の幼な
 きより今年十七才の八ヶ年が間たゞ文の便りのみであつた母子の間柄である。急
 ぎ間の襖をさつと開いて一足そとに踏み出す。
 と、圓頂黒衣の人、其所にありと思ひきや是はまた何としたることぞ、
 兄十郎にも優れし立派やかなる男一人、椽の端居ちかくに控え居る。
 「……………」
 無言のうちに、つと身をかへした母滿江は、突如、間の襖もあらゝかに、はたと
 立て切つたまゝ、再び相見んともせぬ。

たゞ口惜しげに、もの言ふ聲音も打ちふるはせつ
 「さては心憂きことの極みは、夢ならばさめてから、現ならば消えてから、箱王
 其方が其の姿は、如何にして此の母が許しを得てぞ、何のいみじさに男にはな
 つたるぞ、兄十郎が有様に、うらやましとも思うてか、さなさせぞ、たゞ一匹
 の持ち馬だに毛なだらかに得飼ひもせず、一人具したる下人にさへ、四季折々
 に扶持しかぬる今の身の上、明け暮れ見苦げなる其の様には、此の母とて、あ
 はれ誰にか劣るべきと思ふにつけ、涙の隙はなきものを、さりとして思ひ知らで
 ありつることの怨めしさ、物など狂うてぞか……………法師となりぬらんには
 上臈とても下臈とても、乞食頭陀して猶耻じならず、また、下臈なりとて智慧
 才覺のありつらんには、法師に些の謗とてもなし、何がためにと男にはなつた
 るぞ、十郎さへも法師となさでありつることの心安からぬる、其方、またも男
 となられつること、さてはもく復立たしのことぞ。今より後は子とも思はじ。

母ともな思ひぞ、何方なりと志す處へ迷ひゆきや……』
罵りながらも、あはれ何の涙ぞ、悶へつ嘆きつ母が一言一句は、ひしとばかりに
五郎が肺腑を抉る。

『……善を見ては喜び、悪を見ては驚けどこそいへ、世に河津殿ほど果報すくな
き人もあるまで、後世をとぶらふべき人は、御敵とて亡び果て、たましく持ちた
る子供さへに、孝養すべきもの一人とてなきとは……まこと血統のあと絶えて、
目のあたりの本領をよそに見んも悲しくて、若しやと思ふ頼みに、兄は男になし
たりとはいふものゝ、今は名さへもかへて曾我十郎などと言ひつゝあることの
口惜しさ、切めては其方一人法師となつて、父が後世をもとぶらひさせんと思ひ
しことも今はあだしの夢となりつるか、さても心憂なことはしあるものぞ』
涙と共に家の奥ふかく身をひそめたるまゝ二度と再び五郎に會はぬ。

(十三) 兄弟の加擔人

五郎も豫て斯くこそあらんと思ひ、覺悟はして居つたものゝ、斯程まで母の不興
を受けんとは露思ひ設けぬところであつたゆゑ、なくなく十郎に打ち向ひ

『母上が仰せのたまふこと、五郎、一々身にしてみておざりまする、此の上は、人
々の未だ多く知らぬを幸ひ、早々髪切つて母上の御心に適ひ申すでおざりま
せう』

といふ、祐成首を振つて是を許さぬ、

『母上の勘當は豫て覺悟のまへ、今更驚くことあらうや、過ぐる日元服の式執り
行うて未だ間もなきに、今又入道いたさうなどは、以ての外のことである。
人など知つたら笑はるゝものを、さりとてあまりに心弱く、母上とても一旦の
御怒りやがては御勘氣も許さるゝであらうほどに、さな心にかけれぞ。遊びて

心を慰め給へ、祐成、身に替へても申し受くるによつて、心安う居られよ』
 ひたすら五郎を慰めつゝ、兄の十郎は又もや共々に曾我の館を立ち出でる、遊ぶ所は叔母婿三浦介義澄、同じく土肥の次郎が嫡子の彌太郎、従姉妹婿の平六兵衛さては五郎が烏帽子親の北條殿、或生姉婿の二宮太郎、それらの人々が許に通うて、三日四日、時には五日六日と日を暮しゐる、たま／＼曾我の館へ歸つても、五郎は不興の身の上であるから、兄十郎の影に隠れて、折々、母戀しと思ふ時にそつとものゝ隙から垣間みては、獨り其の恙なき様子に胸を安んじ居る。
 斯く日を過して月を閲する間にも猶絶えず祐成、時致の兩人、敵祐經に隙やあるを窺ひ居る其の心には油斷がない。

「兄者人、十郎殿」

一日、五郎は人なき折を見て、兄を呼びかける。

「何ぢや、御事」

「外でもおざらぬがのう、拙者の思ふに、母上の御勘氣うけたも、畢竟は父上の仇討たうがためでおざる、何時まで斯く諸方をたゞ漂ひ居つたところで、祐經奴が首申し受くることよう能ひ申しまするまい、老少不定は世のさため、何時如何なることあつて、祐經病んで失せやうも知れず、また我等不幸にして彼れに先立ち死せんも計り難うおざります、若しや左様の事あつた時には、如何に口惜しう思つたところで既に後の祭り、空しく思ひを殘すばかりではおざるまいか、すりや急いては事を仕損んずるやうのこともおざらうぞ、なれず延びては又折角の機會をも逸し去るの憂もおざる、日がな毎日、斯く諸所方々を漂ひ居つたところで、何の得る所もおざらねば、早々彼の大事を思し立たうではおざるまいか、如何でおざらう」

「それは言ふまでもおざらぬ、我等とても其の事については、疾うに思ひ立つておざるところなれば、如何にも御事が申さるゝ通り、早々いたすであらう、つい

ては彼の京の小次郎殿、一つ我等が加擔人に頼まうと存ずるが、御事は如何に思さるゝか、一腹の兄の事なれば、よも否やはあるまじと思ふが……」

『されば……拙者の思ふには、兄者人の御言葉なれど、右は思ひ止まられた方、寧ろ然るべく存じておざる、と申すのは外でもおざらぬ、兄者人も御存じなさるゝごとく、彼の小次郎殿は、我等が父と何の由縁もなき人でおざる、兄とは言へ、若しも一腹一姓ならんには、よく卑怯なりとも臆病なりとも、必ずや此の企圖の数には洩れまじう存じておざるが、彼の人のみは所詮手に入れんこと思ひの外でおざらうと存ずる、強いに一期の大事を告げ知らせ、事の破れを引き出すも心なき業でおざれば、構へて申されぬ方宜しからうと存ずるが……』

『なれど男と生れしものが、よく異姓他人であらうとも、人の頼みを然まで無氣に斥くこともおざるまいぞ、まして小次郎殿は我等に取つては一腹の兄弟、一つ家に起き伏し居る間なれば、然るべきこともおざるまい』

弟の五郎は小次郎の心を疑つて、大事の秘密を洩らしたうもなかつたが、兄の十郎は自分の心に引きくらべて、さまでに是を疑はず、終に一期の秘密を洩らす

(十四) 小次郎の無情

此の小次郎といふは、兄弟の母満江が、まだ河津の家に嫁がぬ以前、京の人、左衛門尉仲成なるものと馴れ染めて、其の間に設けたる子である、即ち十郎、五郎の二人にとつては、胤こそ違へ、同じ腹から出た一つ兄弟である、十郎が其の心を信じて秘密を洩らしたのも無理ならぬことなのである。然るに此奴、腹こそは兄弟のものと同じなれ、義理も情も何の糸瓜の皮羽織、

『こは以てのほかなることを申さるゝものぞ、さる僻事を企るゝとは、さてく驚き入つたる御分等が御心根でおざる、當鎌倉殿の御代となつて以來、私の宿意あらば唯上へこそ申し上げて訴訟を願へ、人を殺めて日頃の怨みを報いん』

とは、小次郎眞つ平方擔人となること御免を蒙る、第一、今時めく相手の祐經を討たんなどは、御分等の分際として、餘りに荷が勝ち過ぎておざるて…』とばかり、斷然はねつける、

十郎一時は憤然として、其の無情を責めんとまで思つたが

『いや〜、斯かる奴ばらと争ふこと、無益のいたり…』

と、其のまゝに事なく濟ませる。

血氣の五郎は、なか〜に是を承知せぬ、

『さてこそ己れ吐し居つたぞ、庄園諸領の争ひならばいざ知らず、斯かる大事を

上に訴へて何とする、白痴たことを、ようもおめ〜と吐しくさつた。あまつ

さへ、其の分際では祐經を討つこと出来申さぬとは、何處々々までも我等兄弟

を見下した物の言ひやう、必定人の口へも我等が大事を洩らすに相違ない、さ

あらんには一期の大事、とてもものことに其の素頭打ち落して呉れん』

一刀の鞘を拂つて眞つ向微塵になれやと、小次郎の後、追ひかける。

十郎叱して是を止め

『異父とこそいへ、母は一つの小次郎なれば、我等が大事をよも他人に洩らすや

うのことはあるまじ、たゞ兄の身として我等兩人に恙なけれかしとこそ思ひて

斯くは言ひ放つたでおざらうものを、さな事を荒立て給ふな』

と宥め置いて、

『たゞ今申しつること、あれは眞の戯言にておざるほどに、まことし顔には人に

など語り給はれな、若し他人々々に聞ゆるものおざらんには、遍に兄者人の所

爲どこぞ存じて、長く御怨み申すでおざれば…』

と小次郎に堅く口止めをする。

『聞くより如何にも承つておざる、なにぞて他人に斯かること沙汰いたさうや

心安うおざれ』

と小次郎誓つて、其のまゝ十郎と立ち別れる。

五郎、猶も心許なく思つたものか、

『彼奴、酒の三盃も飲まば、何事にあれ、喋口くるやうな腸のなき男、必定は誰にか秘密を洩すであらうに……』

と、頻りに憂ひの眉を擡め居る、

折柄、母の聲として

『十郎は居やるか、祐成は居らぬか』

と呼ぶに、十郎、何事ぞと直ちに母の許へ行く、

五郎、ひとり跡に残つて思ふやう

『必定小次郎奴が、母上に告げ知らしたるに相違はない、さても益なき事を仕出す大白痴よ』

と、心元なく事の成行を案じゐる。

五郎直ちに口を開いていふ、

『さればこそな兄者人へ申さぬまでにはおざらぬものを……彼奴小次郎の大白痴奴が、よしなきことを母上の御耳に入れたるばかりに、いさゝ母上が御心づかひを遊ばすのでおざる、此の上は身持放埒に装ふて、せめては斯かる大事を思ひ立ち居らぬやう計らひ給へ』

果して母は、祐成を膝もとに置いて、小次郎から聞き及んだ一伍一什について細々の意見を、十郎さま／＼に是を説きなして、
『……我等、いまの分際にては思ひも寄らぬこと……』
とのみ、漸くにして我が室へと歸り来る。

(十五) 虎御前と十郎祐成

十郎、きくより

『身持放埒を装へとて、さて如何にして……』
と問ひ尋ねる、

『されば……まづ白拍子もおざれば傾城もおざる、斯様のものは我が家へ入れぬ限りには、男に僻事あればとて、罪科を及ぼす虞れとてはおざりますまい、思召しありたらんには、酒匂も宜うおざらう、古宇津も宜うおざらう、さては大磯小磯の遊君も宜うおざりませう。精々遊び馴れてお通ひめされ、しかも其のあたりの街道は、敵祐経が度々鎌倉と本國伊豆との間に往返する所、あはよくば彼を討つて取らん便宜がないでもおざるまいと、我等存じておざります』

細々と五郎が答へる、それを聞いて十郎も

『まこと、御事が申さるゝ通り、表面に心を亂して、内に敵を狙ふとは面白のこ

とよ、如何にも其の事うけたまはつておつたう』

と、五郎ともく打ち連れて、大磯小磯はいふもさら、酒匂、古宇津を始めとし、平塚、鎌倉のあたりまで、足繁く往き來して遊び歩く、

もとより身貧にして、飾るべき衣装とてもない、水淺黄の衣地に、大紋に千鳥を染め出したるを着たる儘に、日々、其のあたりを徘徊する。

一日、大磯の宿に來かゝつた折柄、俄かの白雨に出遇ふ、十郎、何處かの軒場に雨を避けんとしたが、さてはしたなく逃げ迷ふも異なるものと思ひ、例の大紋きたるまゝ、悠々と歩き行く、

『卒爾ながら、もの申しまする、此方失禮なれど雨具の御用意もなく、御難儀の御様子、御遠慮なくは彼の家まで御立ち寄りあれと、わらは主人、申しておつたうする』

一人の女の童が走り來つて十郎にいふ、

十郎大きに喜んで、

『こは有難き御好意』

とばかり、直ちに伴はれたる家に入る。

流石に、此の宿切つての長者が家だけあつて、茶よ、菓子よと様々に待遇す、

十郎少しも臆せず

『誠に千萬悉しけなうござる』

と禮を述べつゝ、遠慮なう馳走にあづかる。

茲に、當大磯宿の長者菊鶴が許に、虎といへる美女がある。

父は一年、故あつて東に流された伏見大納言實基卿、母は當長者が愛娘である。

心ざま誠に尋常にして、遠く人丸、赤人のあとを尋ね、業平さては源氏、伊勢の

物語にまで情をうつし、春は花のこずえに散りまがふ、霞がくれの天つ雁、雲井

の上うへに心こころを殘のこし、秋あきは月つきの前まへに、曇くもらぬ時雨しぐれの夜風よらしに、明あけゆく雲くもの浮うき枕まくら、鹿しかの音ね近ちかき野邊のべごとに、虫むしの聲こゑ々々ものすごく、哀あはれを催もよほす小田守せだもりの、庵いほりさびしきこがらしまで、心こころをやらぬ方かたはなしといはれてあるが如ごとく、和歌わかの道みちにもなかくくに堪能たんのうである、殊ことに、年としこそ未すまなれ、寅とらの月つき、寅とらの日ひ、寅とらの刻こくに生うまれたので、通とほり名なを三虎御前さんこごぜんと名づけられ、花はなの如ごとき艷容麗姿えんようれいしは、いや聞きえに走迫おちこちの人々ひとぐが耳みみに聞きえて居ゐる。

十郎ちゅうと虎とら、此この日初ひつめての見參けんさんをする。

一つは身装みなりこそ聊いさか美うつくしからね、坂東八ヶ國切つての猛者まうさにして、また美男びなんの名なを得えた河津かづの三郎祐泰さぶらうすけやすが嫡男ちやくなん十郎祐成じゅうらうすけなりである。一つは當時とうじ艷名えんめい隠かくれなき絶世ぜつせいの美人びじんたる大磯おほいその長者ちやうじやの虎御前とらごぜんである。

美男びなんと美女びじよ、早はやくも兩人らうにんは相思さうしの間柄あひだらとなる、時ときに十郎ちゅうは二十歳にじふさい、虎御前とらごぜんはまさか

以來二人の交情は、月と共に加はり、年と共に増して、今は互に離れともなき戀の淵、落ちては流石に上りもえならず、千代八千代の末までもと深く契りをこめる。

果ては十郎も

『虎を手元へ迎へ取らんには……』

と折に觸れ時につけて、弟の五郎にほのめかす、その都度、五郎は

『由なきこととして、あはれを残し給ふな』

と、流石に兄の心を思ひやらぬでもないが、一期の大事を思うて、涙を裡に諫め止める。

(十六) 兄を思ふ弟の心

こゝに又、兄弟が叔母婿にあたる三浦別當の館に、かたかひなる召し使ひの美女

がある。當の別當、しばし是に情をかけたるより、薄々ながらも女房が知つて甚だ心安からぬことに是を思ひ、如何にもして思ひ止らせんと日夜心を碎く、別當それと覺つて、

『さては早くも埋火の下にこがる、薰物の、匂ひは余所にあらはれしか、今は是非なし、移る心を此のまゝに、事を限るこそ宜けれ、さるにしても如何にせばよ……』

と兎つあいつ思案する。

此方はまた別當の女房急ぎ十郎が許に人を走らせて

『いさゝか十郎殿に御話し申したきことおざるにより、御足勞ながら御出でを願ふ』

と口上させる。

十郎、何事ならんと、三浦の館へ赴く、叔母はそれをひそかに一間へ呼び入れて

「外ならぬことながら、此方、かたかひと呼ぶ女を召し使つておざりまする、容姿といひ、心様といひ、まこと優れて、品世に越えておざりまするにより、曾我へ伴ひ行かれては如何でおざりませうか、風の便のおとづれに、待つには音する習ひありとか、思し召しあらば、決して苦しからぬことにておざりまするほどに、早々御伴ひめされ……」

といふ、

十郎思ひがけぬことをいふものかなと、一旦は思ひなしながらも、親方のいふ事なり、且は不測の災、身に及ぶとは知るに由なければ

「承つておざりまする」

と、其のまゝ、直ちに歸途につく、かたかひは未だ行くまでもなければと猶茲に止まるこのこと早くも別當の郎黨どもに聞えしものから

「かたかひを曾我へ取り行かるゝぞ」

と、一圖に思ひなし、伊澤の平藏、はかせの源八、難波の太郎などを先として、宗徒のものども七八人

「怪しうも振舞ひめさる祐成殿かな、別當殿に申すまでもあらじ、あと追付いてかたかひを奪ひ返すでおざらう」

「それ宜しうおざらう」

「さらば馬引けやッ」

と各々駒に打ち乗つて、無二無三にあと追ひ掛ける。

十郎、斯くとも知らで、只一人、三浦を立ち出で、静かにつぶな川の畔まで来る。

折柄、後に響く時ならぬ人馬の物音、

「何事ぞ……」

十郎が後振向く間もあらせで、弓に矢をつがへざる乗り込み來つた以前の面々、

ひし／＼と十郎が身の周囲を取り巻く、

『こは何としたることぞ』

十郎、不審に堪えず問ひ尋ねる、

追駆け來つたものも、十郎が身邊を見るにかたかひの姿は見えぬ、いさゝか張り合ひ抜けして

『こは何としたる事ぞ』

と互に同じことをいふのみ、

十郎、不思議に思ひながらも

『此方に何ぞ恨みあつての御事か、理不盡なる此の有様、理由は如何に、事體は如何に……』

と厳しく人々を責める、

伊澤の平藏、進み出で、

『我等、まこと、赤面のいたりながら、先刻のほど、實は是々斯様々々のことを耳にいたしておざつたにより、怪しうな御振舞ひをいたさるゝものかな、早々後追付き申して、かたかひを連れ戻るべしと、殿にも申し上げず、獨斷にて斯くはいたしておざりまする、なれど只今御見受け申しまするところ、かたかひの姿も見えず、いづれは人の讒言とも覺えまするにより、我等失禮のだんだん平に御許し下されませい』

打ち詫ぶるのもそこ／＼に、逃げ歸る。

そのことあつてより以來、弟の五郎は只管兄の身の上を案じ、かた／＼何時なんどき、敵祐經に廻り逢ふも計り難ければと、常に兄の身に引き添うて片時も離れず、影の形につき従ふ如く守護り居る。

兄一人、弟一人、五郎が心遣ひも普通一と通りのことにてはない。

さるほどに、十郎が大磯に通ふことも早三とせ、虎御前との交情は既に知らぬものゝないまでに、普く人の口の端にも上るやうになつた。

一日、豫て思ひ待ちに待つた敵の祐経が、伊豆より鎌倉へ上るよしを聞き、兄弟互に顔見合せて、

『年頃頃、此の大磯へ通ひ馴たも是あるがためにほかならぬ、さらば戸上が原こそ、屈竟の處なれ、彼處に潜んで、怨の矢、一筋射かけばや……』

と、弓おし張つて、矢をかきおひ、駒の足掻を早めてぞ其の場に走せ赴く。折しも遙か彼方に馳せ行く一團の騎馬武者、其の數凡そ五十騎ほどである。確かにそれぞと、兄弟キツと瞳を放つて見たれど、定かに祐経ありとも見分け

がつかぬ、たゞ江馬小次郎義時と連れ立つものこそ、要あるものなれと思ひながらも、彼方は何分にも多くの人々に取り圍まれて居る身、此方は兄弟たゞ二人。

『斯くては今討ち果さんこと、迎も及ばぬ、口惜しきことながら、また來ん機會

を狙ふにしかじ』

と、無念の齒がみをなして、兄弟、空しく駒の頭を向け直す。

斯くて曾我の館に立ち歸り、居ること數日、つれづれなるまゝに、十郎またまた虎御前の許へ趣く。

虎は先の日、祐成と別れてより、住みも定めぬ世の中の、遷り變るも怨めしく戀の暮とやいつはりやを、頼み顔なるうら情、向ひていふも流石とは思ひながらもさてまた何時と夕つかた、越し方ゆく末のことどもを、つくづく思ひつらぬるにまこと男の心ほど、頼み少なきものはなく、げに淺からず契りしも、空しかりける妹脊仲、たのみし末もいつしかに、變りはてぬる言の葉と、思へば何時に同じ世に、逢ひて怨みを語るべき、げにや昔を思うても、ものは遠きを珍らしく、年は稀なるを貴しとすとか、何をしさのみ疎きやらんと、ひとり戀しの人を思ひ過して、涙に咽ぶ其の夕暮、五月雨の風より晴るゝ雲の絶え間に、あはれ、うれし

ともなき時鳥が只一と聲。

夏山に鳴く時鳥心あらば

もの思ふ身に聲な聞かせそ

と流石女の氣も弱くひとり悄然としてある折柄、

『ほど遙かに無沙汰いたしてござるが、其の後はいかに……心もどなきまゝに、

十郎参つてござるよ』

といふ聲。

雨の日、風の日、つかの間とても忘れえぬ戀し慕しの人の、思ひがけなき其の聲に、虎はハツと我れにもあらず、顔打ち緒らめたまゝ、いらへもなさでつと奥の間に走り入る。

十郎其の様子に、

『さて〜無骨の處へ参つてござつたか、情けは人のためならず、機會を見て、

又こそ参るでござらうよ……』

と其のまゝに歸らんとする。

一と間のうちに見てあつた虎は、斯くと見て、

『なんぼう、様は無情うござりまするよ、わらは左様には思ひ奉らぬものを……』
戀にやつれた虎の姿は、又なくも艶である。

『……このほど來の様が打ち絶えめされた怨めしさに、思はず今の今まで此所に泣いてござりましたなれど、思ひ掛けなき様の御越し……涙のこぼるゝ顔が、たゞ耻しうて耻しうて……』

といひ放ちざま、心の嬉しさは流石に隠しもえならず、ひしとばかりに祐成が直垂に取り絶る。

十郎とても思ひは同じ戀の惱み、

『……………』

たゞ無言に虎を搔き抱く。

(一八) 浅間の狩くら

當時、將軍源頼朝は、天下の霸權を握つてより茲に數年、刑鞆蒲朽ちて螢ひなく去り、諫鼓若深うして鳥驚かぬ、御代静かなるまゝに、或る時寵臣梶原を召んで、

『このほどの徒然に、狩野の遊びせんこそ一入の慰めと思ふものから、近國の武士ども驅り催ほして、各々其の用意せさせよ』
と命じて、信州は浅間の麓、三原に狩くらせんことを觸れ示させる。

五郎、斯くと知つて、直ちに兄祐成の許に走り行いて、
『こたび、鎌倉殿の御思召により、信濃の浅間を狩くらせらるべきこと、此のあたりの國々にある侍に觸れられておざりまする、あはれ御供申して、便宜を窺

うては如何におざりませうか、斯様の處にあつてこそ、祐經めを討つて捨てんの隙もおざらうと存じまする』
と告げる。

『そはもとより望むところである、なれどいかゞせん、信濃まで御供つかまつるには又仕るべき用意もせねばならぬ、せめては馬の四五匹もありつらんにはのう……』

十郎とても、宜き機會とは思ひながら、身の貧なるがために、いさゝか躊躇ひある。

『イヤ、左様に思召されたらんには、此の事いつの日とてか、思ひ果し得るでおざらう、斯かる御言葉を仰せらるゝとは、日頃の兄者人にも似氣なきことでおざる、君につかへ、御恩を蒙るが如き、いみじき身にてあらんにはすりや乗替へ馬をも引かせ、人をも召し連れて、美々しう扮装つも宜うおざらうよ、

なれど我等が今の身には斯かること至極の無用、榮華名門は世にありてのことでござりまする、たゞ蓑笠に姿を隠し、藁沓穿いて、弓矢は事々しうござるに
より、太刀ばかり所持の上、雑人ばらに交つて便宜を窺ふにしくはござりませぬ、早々思し立ちめされては如何ござりまする』
五郎が重ねていふ言葉に、

『ならば……』

と十郎も、曾我の館へは、猶、三浦、北條に遊ぶが如く見せかけて、ともに浅間の狩くらへと忍び出でる。

行く／＼兄弟のものは、如何にもして、敵祐經の間近に近寄らんとは思つたが泊り／＼の宿々に於て、

『盗人に馬取らるゝな、怪しきものあらば堅く咎めよ』

とあつて、警戒なか／＼に嚴密である。其上、敵は常に御座所近くにあることゆ

え、容易に進み近づくことが出来ぬ。

かゝるうちに何時か武藏の國は關戸の宿に着く。

此所に於ても兄弟、頻りに祐經を附け狙つたが、天いまだ二人のものを幸せず討つことは愚か、敵の間近へも寄ることが出来ぬ。

やがて、入間の久米にて、追鳥狩が催される。兄弟、身輕に扮装つて、

『……或は討つべき便宜もやある……』

と、勢子の仲間に立ち交つて、狩杖ふり立てつゝ、心にもない鳥を追ひ立てる。追ひ立てながらも、其の落場には目も懸けぬ。

『尋ぬる人は何處にかある』

と、兩人血眼になつて、岡といはず、谷といはず、そこ此處のきらひなく、搜り歩く。たまさか、敵に出遭うて、

『ヤレ嬉しや……』

と思ふうちに、相手は馬上なるゆえ、忽ちに姿が見えずなる、そのうへ矢射かけ
んにも其の用意なければ、空しく餘所目ばかりにて日を暮す。
斯くて其の夜は入間川の宿にやどる。

(一九) 情 の 重 忠

人々の警戒は以前にも増して嚴重である、時を置いては番人が、

『御用心候へ、他國より盜賊あまた、こして候ふぞ』

と、いひく通り過ぎる。

兄弟は是れ幸ひと、直ちに夜廻りの如くに身繕ひして、大聲に

『御用心候へ、他國より盜賊あまた、こして候ふぞ』

と、館々をいひめぐる。

見知つた人もなきまゝに、誰一人として是を咎むるものもない。

彼方此方と敵の所在を尋ね歩いた末やうやくにして祐經の館を搜ぐり求める、
それとなく四邊の様子を見るに、幸ひ人も居らぬ。

『あはれ、よき機會ぞ』

とばかり、そと廣庭へまぎれ入る。

折柄、新田の三郎が俄かの客入り、若黨あまた引き具して來つた様子に、

『何處までも兄弟が不運か、こは見咎められなば一期の大事ぞ……』

と、又もや機を逸し去る。と、不運は不運に重つて、折あしくも其の處に來合せ
たは畠山の重忠、是亦多くの從者を引き連れて松明の光りに道を振り照らさせつ
ゝ、ハタと兄弟のものに出で遭ふ、

『こは何ぞしたることぞ、不運の時よ』

いち早くも、傍の影へ忍び入る。

それと敏くも露見た此方は、畠山の郎黨、

「何者なるぞ、怪しうなくば出で、顔見せい……」

バラ／＼と其の處を取巻く、持つたる松明に、四邊は晝と輝く、兄弟のものも

「今は是非なし……」

と、つと其の顔を起す。

と、見たる畠山の重忠、何者なるぞと、よくよく見れば、思ひきや曾我の十郎、

同じく五郎の兄弟である、

『さては……』

と早くも思ひ當る所あつて、

『ものども控えい、咎めずとも宜きものぞ、捨て置き、捨て置き』

と、其の儘に立ち去る。

兄弟ホツと一息して、互に顔見合すのみ、明けの日、重忠が許より、

『御志のほど哀れに覺え候、わざと詳くは申さず候、後楯にはなり申すべし、

御用意こそ候ふらはめど、此の品、いさ／＼かながら參らす』

と、封の書状に、糧物添へて、下人に持たせよとす。

兄弟のものも今更ながら重忠が情けに、たゞ、

『有難くどころ……』

と、嬉しさを裡に、返禮して使ひのものを返す。げに捨つる神あれば、助ける神もある世のならひ、兄弟は人知れず心の中に、重忠を拜したのである。

斯くて翌日は大藏の宿其の翌日は兒玉の宿と、夜に夜を重ねて、いつか武藏の

國も空しく通り過ぎて、はや上野の國は、信濃の國と境なる碓氷峠に差しかゝる

こゝで折柄朝倉山の影ふかく、露吹きむすぶ風の音に、まだ立ち残る薄雲の、峰

より晴るゝ朝ぼらけ、梢まばらの遠里を、勢子聲狩杖の音もしげく狩り立てる。

其の日は黄昏れ時から、山めぐりの村雨がシト／＼と降り注ぐ、人々は袂を濡

らし、裾を濡らして、早々各自の館へ引き上げる。晝の狩くらで、皆少なからず

疲勞をしてゐる、夜の警戒も以前に比して緩かである。

斯くぞ見た十郎、五郎の兄弟は、

『今宵こそ便宜やあらん』

と、一期の本懐を夢みては、また他事を顧みるの暇もない、雜人姿に身をやつして、深編笠に隠れ蓑、太刀佩きなして、敵工藤の館や如何にぞ、彼方此方を尋ね歩く。

(110) 兄弟と景季

折しも、梶原の源太景季が、三浦、館よりのその歸るさ、ハタと兄弟のものに出遇ふ。

『こは面倒なる人に遇ひしよな、見とがめられぬうちにこそ……』
と、兩人笠を深く傾けて、毗にかけつゝ通り過ぎんとする。

源太景季、いち早くも是を見て、

『あれなるものどもの怪しさよ、止れい』

と聲高に咎め立てる。

左右に控えた供廻りのもの達も、

『それ曲者よ、押へい』

といひさま、バラ／＼バラ／＼と追つ取り圍む。

十郎祐成、此の様子に、笠の中より聲をかけて、

『アイヤ卒爾ばしめさるな、是は和田殿の難色でおさる、決して怪しうなものに

てはおざりませぬ』

と、いふ其の言葉じりを取つて、

『ナニ和田殿の難色でおさるとな、和田殿の難色ならば、何とて此方の姿を見て俄かに忍ばれておさるか、名乗りめされいお聞かしめされい』

と早速に詰め寄る。

『イヤ我等は和田殿の御内にて、藤源次と申すものでござる。和田殿の御所へ参られておはす其の隙をはかり、御館の次第を見物な仕らんと存じて、是まで参つてござりましたなれど、最早、和田殿、お退りの時刻でござるほどに、早々立ち歸るところでござりまする』

十郎は飽くまで、もの静かに言つてのけたが、梶原の雑色は、容易に是を信じない。

『ナニ藤源次とな……藤源次は我等も見知つて居るわ、其方ごときものではない。なきぞ、他人の名前を欺かる奴、怪しうなものではなくて何とする。面みせい』
ひんづとばかりに、十郎が被つた笠の縁に手をかける。

源太景季、これを見て、

『さればこそ怪しうな奴ばら……引つ捕へて、繩かけ』

と聲をかける。

兄弟のものを追つ取り圍んだ雑色のものは此の聲に、ひしめき叫んで引つ縛らんとする。

弟の五郎時致、大いに驚き怒つて、

『寄れば寄れや、無法な繩かけん其の先に……』

お主等が素首、打ち落して呉る……』

と、腰なる大刀の鯉口、プツツリ切つて身構へる。

思はぬところで、血の雨は、將に降らんとする。

御所より退つて來たる和田左衛門尉義盛は、此の有様をみて、

『何事や起れる……』

と、源太の傍ちかく近寄つて、よく見れば、和田殿の御内の者といふ聲が聞える。

『あては……』

と思つて、聲するもの、様子を見るに、案に違はず、十郎五郎の兄弟が、賤しき雑色の姿に身をやつして、思ひ入つたる其の志のほど、みるからに先づ涙が滴れる。

源太は義盛の來たのを幸ひに、

『アイヤ是は和田殿でおどつたか、宜き折柄でござる。是なる兩人のもの、和田殿御内のものにておどるか』

と聞き詰むる。

義盛何の躊躇するところもなく、

『いかにも……あの冠者ばらは義盛が身内のものでござる』
と答へる。

源太、重ねて

『しかと左様でおどるな』

『いかにも、確かに左様でおどる。怪しうなものではおざらぬ』
義盛がキツバリと言ひ切る答へに、

『さらば……』

と梶原は其の場を引き去る。

後見送つた義盛は、態と聲高く聞えよがしに

『奇怪なる其の方どもの振舞ひ、早々に罷り退れい』

と、心にもあらぬことを言ひながら、是も其處を立ち去る。

(二二) 義盛の同情

兄弟、心に義盛の情ある計ひを謝しつゝも、

『いかに五郎、いまの源太が振舞ひは……』

ど、いふ十郎の言葉に、

『何條許し置くべき奴でおざらうや、今一言を吐きしならんには、彼奴の素つ首は、此の腰のもの、切れ味試し……惜しいことをしておざるよ、アツハツハ……』

ど何處までも五郎は大膽不敵、

斯くて兄弟のものは、苅谷の宿に立ち歸り居る。

山めぐりの村時雨は、又してもハラ／＼と雨戸を打つ。夜は漸くに更けて、静寂の氣は次第に深くなりまさる。

折節、戸外の方に當つて、異様の物音がする、

『まさしく、此のあたりと覺えておざるが如何でおざる』

『確かに此のあたりでおざる、間違ひはおざらぬ』

ヒソ／＼と話し合ふ聲に入り交つて、さても怪しや、物の具の觸れる音、太刀の

鞘當りする音などが、聞える。

確かに數人の人の物音である。

『さては梶原が我等兄弟を憎むのあまり、此のところへ討手など押し掛けさせたに相違なし。何ほどの事やある、斬つ拂つて我等が腕の冴えを示して呉れん』

五郎が、はやり立つのを、十郎其の袖をひかえて、

『静にせよ、疎忽の振舞ひして、後に笑をば残すまじきぞ。ともあれ、先づ内なる燈火をば消して闇にせよ』

燈火を消させて、

『たとひ何十人、寄せ來るとも、眞つ先がけて入り來つたるものを斬り伏せい。二番と續いては、よも打ち入るものあらじ。よし乗り越えて斬り入るとも、裾など、脛など、斬つ拂つて薙ぎ伏せい。かまへて我等が傍を離るゝな』

と、太刀おつ取つて、既に家の内を駆け出でんとする五郎を押し止める。

兄弟手早く身拵へを固めて、戸口の傍にピッタリと引き添ひながら、一步なりとも家の内に押し入らんか、片つ端から横薙ぐりに薙いで斬つ拂ひ呉れんと、大

刀の柄にいつかど手を掛けて、堅唾を呑みつ待ち受ける。

戸外の方からは漸て、
『御兄弟やおはする。是は和田殿よりの御使者でおざる。先刻のほどは危くこそ見えておざりましたなれど、幸ひ事無く相済んで、近頃の大慶に存じまする。豫々御用意もいたされておざらうが、是は國より持たせたものでおざるに依つて、些少ながら御兩所に進上いたし申す。この度の御供、いかにも御志のほど感じ入つておざる。願はくば随分とも、御手柄をあらはしてたまはれ。御迎へいたすべきではおざるが、態と左様仕らぬほどに是へ持参いたさせておざるにより、御承け取り下されませど、主人よりの仰せでおざりまする』
といふ聲。

まがふ方なき義盛が郎黨志度路の源七である。

兄弟不審に思ひながら、戸を開いて外に立ち出づれば、樽のもの二つ三つに、
瓶米そへて、其の處へ差出してある。

兄弟大いに喜んで、

『御志のほど、誠に千萬忝なふおざる、態と御禮にも罷り出でねば、宜しう御執成し下されい』

と深く使ひのものに言ひ含めてやる。
兄弟早速に樽を開いて、今更に義盛の志に厚く感謝する。

(三三) 敵 の 姿

夜は明ける。
兩人またも雜人姿に身をやつして、蓑笠を着、藁沓をしばり穿いて、再び狩くら

の野に、

『機會こそあれかし……』

と敵祐經を狙ふ。

併し例によつて、警戒は嚴しい、逆も二人の力に及ばぬ。

斯くて碓氷峠の險も空しく過ぎて、沓掛の宿に着く。

用心は依然として嚴密である。手を下さんにも其の由なく、徒らに悶々の心を胸に秘して居るばかりである。

翌日は、遂に三原に着する。

此處こそは狩くらの場所と、豫て人々が思ひ期して居つた所だけあつて、人も馬も、縦横無盡に、山野を馳驅すること七日、

『何の誰は猪を獲たさうな』

『某は美事な鹿を射止めたよな』

獲物々々の噂さは、到るところで喧びすしい。

しかも兄弟二人の目指すところは、たゞ敵の工藤祐經である。もとより猪もなければ鹿もない。胸中、願ふところは、たゞ祐經、彼れ一人あるのみである。

晝は終日、夜は終宵、尾けつ、狙ひつするけれども、目指す敵の獲物は、遺憾ながら容易には、其の手に入らぬ。

不幸にして、此處の狩りは終に了りを告げる、時は未だ至らぬ。

兄弟は人しれず、悲憤の涙に、夜を泣き明す。

頼朝は、やがて上野へ立ち越えて、大戸、岩永、三の倉、室田、長野と、次第に狩くらしした。何時か利根川の大渡しも打ち渡る。

赤城の山懐に這入つて、狩り暮らすことが約七日。

下野へ出て、笠掛ヶ原を通り、宇都宮に着く。此處に逗留することが三日ばかり、それより那須の原に行つて、茫々たる原野を狩りくらすこと又七日ほど。

兄弟は勢子のもものどものの中に紛れ入つて、人目がくれに類りと、好機を狙ひる。

併しながら、よそ目しげみの草の原、わきて知らるゝ夕風の、誰ともさだかに辨へぬ青竹おろしの狩場にて、左衛門祐経が、二匹つれだつ牝鹿に目を懸けて、下りざまに弓おつ取りのべて、乗り落すのを一と目みただかりである。

十郎が、

『五郎、來れッ！』

と、共々にその後追驅けた時は、既に遅い。敵の影は、早くも斷雲みだれ飛ぶ那須野の原に消え失せてしまつた後である。

無念といふも、まこと、餘りあることであつた。

さるほどに頼朝は、青竹おろしの館に入つて、更闌け、夜静まるまで、日々酒宴のうちに時を送つてゐたが。一夜、酒宴の座に、微かながら鹿の音が聞えたの

を耳にして、

『何處に……』

とこそ近侍のものに問ひ尋ねられる。

折から宇都宮彌三郎が、

『あの鹿の音の聞ゆるは、板鼻のほとりであつてあります』

と答へたに、

『古の人も、鹿の音近き秋の山越えとこそ詠み捨てたに、夏の野に鹿の鳴くこそ不思議である』

と小首かたむけて不審がる。

傍に居た朝綱が是を聞いて、

『さることのおざります。其の昔、平井の保昌と申す人、丹後の國に下りましたる折り、彼の國の朝妻といふ狩坐に、一日の樂みをいたしておざりますが

傳へ聞く其の山の鹿は、夜に入れば、山には住まで汀に下つて並び臥すとか申すことで、其の汀に下つた隙に、山へ勢子を入れて、夜の中に引き廻し、海には舟を浮かべて、曉のころ廣き濱邊に追ひ出し、思ひ／＼に或は射て取り、或は海中に入るものをば、櫓にて討ち取るとかいふことでおざります。保昌も是にならふて、件の朝妻に陣を取り、射手を三百人ほど揃へて、勢子を山に入れ、明くるをおそしと待ち構へましたるその折柄に、斯くと聞き知つたる妻の和泉式部が、夜半に及んで鳴きつれる鹿の聲に、

ことわりやいかで雄鹿のなかざらん

今宵ばかりの命とおもへば

と詠みましたので、保昌も其の歌のことわりに愛で、俄に道心おこして、其の日の狩を中止したとか、今に申し傳へておざります。思ふに此の那須野の鹿も、明日の命をや悲しみて、啼きつれ居るのでおざりませうと、朝綱考へま

して、おざりまする』

と、頼朝に告げる。

頼朝も是を聞いて、

『まこと、平氏の一類にも、此の善事あるか。我も源氏の正統であるほどに、いかでか是を憐れと思はざることやある』
と、其のまゝ此處の狩くらを止めて、鎌倉へ立ち歸られる。

(二三) 圖らざる吉左右

兄弟、斯くと知つて、無念の至極に思つたけれども、今は如何ともすることを得ぬ。

『せめてその、歸途の宿々にても……』

と猶も尾け狙つた其の甲斐なく、空しくも再び舊の三浦の館に立ち戻るべく、

餘儀なきに至つた。

『あゝ斯かる時機に志を遂げ得ずんば、又何時の日にか此の本意を達すべき』
流石の十郎も、弟の五郎と相對して、撫然たること暫時。

折しも圖らざる吉左右は、天の與へか、兄弟兩人の耳朶をこそ打つたれ。

將軍頼朝は、那須野の狩くらをば、朝綱の一言に依つて、一と度び中止したものの、餘勇いまだ猶ほ失せず、鎌倉に歸り來つた其の後に於て、又々梶原平三景時を召して、

『先つ頃、信州淺間の麓なる三原野に狩くらしいたせし折から、集れる武士どもの數々、いまに暇を取らずべからず。東國に狩場多しとはいへ、富士の野に過ぎ勝るところあらじ。此の度の序でに狩り立てんほどに、一同のものに、然るべく申し傳へい』
と、命じる。

平三景時、此の旨を受けて、直ちにそれぞれへ披露に及ぶ。

三浦の館にあつて、是を聞いたる五郎は、大いに喜ぶ。今まで不遇の嘆を啣つて居た時致は、躍り上るまでに打ち喜んで、兄の十郎祐成に向ひ、

『我等が最後の時も近づいたやうに覺えます。鎌倉殿このたび、國々の武士どもを歸したまはで、富士の野に御狩あるよし、觸れ出されておざります。我等いつまで生き存へて物思ふも、はや心苦しうおざるによつて、此の度の御狩を幸ひ、早々思し召すところを、御定めあれ』
と、思ひ入つて語る。

兄の十郎も是を聞いて、

『そは此の上もなき仕合せである。こたびのほどは道程も近ければ、馬の一匹などあらんには、充分、事を爲し遂げ得るでおざらうよ。心地よき事であられる』
と、是亦、大いに打ち喜ぶ。

『さるにしても、先つ頃には、隙を窺ひ、便宜を狙ひ居つたればこそ、本意も、まこと、遂げ得なんだでおざつたが、身を捨て命を捨て、事を行はんには、何とて一期の本懐を達し得ぬことおざらうや、遠かりつらんには、射殺すも宜しく、近くば討ち取つて無念を晴らさんも宜うおざらう。御館なればとて、何條、憚るところやあるべき。恨み重なる敵の祐經奴を、我等が手に掛け得ずんば、我等が命をこそ、敵に捨つべけれ。一と度、曾我の里を立ち出づるからには、二度と再び、故郷の土を踏まじと、我等疾うに思ひ定めておざる』

鐵意、一と度なつては、五郎の心、泰然として、亦山の如し。

『いしくも申されたりなし。祐成とても、斯くこそ思へ、何とて生き存へんの所存やあるべき。自身をかばへばこそ、敵の隙をも狙へ、處をも嫌ふのでおざる。不運にして、我等若か仕損ずるものなりつらんには、悪靈、死靈ともなつて、彼れ祐經奴が一命を奪ひ取つて呉れん。慈悲いなる此の命は生きて旦暮、物思

ふも悲し。

『鎌倉殿の御立ちも、兩三日が中にありと聞けば、いでや我等も共々に此處を打ち立つて、急ぎ富士野の狩場に馳せ参るでおざらう。それにつけても、先つ頃の狩くらに、手引だにありしならんには、多年の本望を遂げ得ておざらうものを、手引のなかりしところ、今に残念の至極でおざる。此度は然るべき手引を定めておざるが、三浦の與一は如何に……我等とは從兄の間柄なれば、よも手引を否まんと、あるまじと思へど……』

『さはれ兄者人よ。先度は京の小次郎がこどもおざるよ。無益な事ばしたまふな』
 『なれど與一は、小次郎ごとき、腐れ武士にてもあるまじ。さるにしても、今日伯母御前と別れ参らせては、又、逢ひ奉つらんことも叶ふまじと思へば、是より伯母御前に御暇乞な申して來るでおざらう。其方も共に参られい』
 兄弟は奥の一と間に這入つて、伯母なる人に懇ろに暇を告げる。

(二四) 伯 母 の 涙

『さてもく、常に似合はぬ暇乞ひ、こは何としてぞ』

伯母は早くも心中に訝かしみながらも、盃を取り出して、酒など侷めつゝ、

『いつもは此のやうなる事も、とんどおざらなんだであつたものを、今日に限つて物哀れな状に、暇乞しめさることは、何ぞ由ありげな様子。殿原のこたび御供に出でらるゝこと、必定仔細のおざりませう。曾我に母者人のおはします間は、穩しうこそ日を送りたまへや。十郎殿も、五郎殿も、よく心して、事など起しめされぞ』

と、果ては袂の袖を顔に押し當て、サメく泣き悲しむ。

十郎、此の様子に、

『さては、早、色になど表はれてか』

と心に驚いたが、さりとて告げ知らすべきことでもないから、表面は何處までもと、何氣なき體に装うて、

『こは思ひもよらぬことを御仰せめさることかな。我等分際として、何とて然る大事をばし思ひ立ち申すべき。たゞ後日の語り草にもと、狩場の様子を見知り置くまでにおざりませう。富士の野より歸り申さば、追つ付け取り急いで参りますのでおざりませう程に、御心安く居らせられませい。さまでに御心なと痛めさせられまするな』

と、様々にいたはり慰めつゝ、一期の本懐を果さんの所存、知られまじと、やがてのことに其所を辭して立ち上がる。

伯母は虫が知らずか、何となく心に懸つて堪へがたく、別れともない思ひのするまゝに、棲戸の際までも送り出で、

『富士の野より御歸りあらば、早々、此家へ來られよ。伯母は殿原の御入りをば』

心待ちに待ち詫びておざりませうほどに、夢になと、此の家への道、御忘れめさるな』

と、呉れくも兄弟のものに打ち啣つ。

十郎、五郎、ともくく涙をうちに隠して、

『御仰せのほど、夢さらく忘れは仕りませぬ。さらば伯母上、是にて御別れ申しまする』

と、此處に一遍の別れを告げて、三浦の館を立ち去る。

兩人、更に三浦與一の方に立ち寄る。

與一は、三浦の伯母が、狩野介宗茂に嫁したる時に、設けた子である。其の後、故あつて、伯母が離縁となるや、與一を連子して、義澄のもとに嫁ぐこととなつた。兄弟のためは、何れにしても従兄の間柄なのである。日頃親しい仲の十郎は、是を何うかなして、自分の方人に頼まふと思つたのである。

『我等今日、和殿を御訪ね申したは、餘の儀にもおざりませぬ。一期の大事あつて、是まで罷り越しておざりまするが、何とお聞き入れ下さることは、相成り申すまいでおざらうか。我等、折入つて御頼み申したきこと、是があるのでおざりませぬ』

『何事かは存じ申さねど、何にてもあれ、御分等が御頼みとあらば、與一、必ず諸なひ申すでおざらう。一期の大事とやら、心安う御明しあれ、何とて否み申すことおざらうや、必ずともに御心配御無用、速かに遠慮なう御明しめされよ與一、快よふ御受がひ申すでおざらう』

『其の御言葉、我等なんぼうか嬉しう存じ申しておさる。一期の大事とは、外にてもおざりませぬ。和殿にも豫て聞き召されておざらうが、我等身のうちに、容易ならぬ大事の思ひあつておざりまする。なれど當の敵祐経は、今諸人の上にあつて、家臣郎黨数多つき随へさせ居るがため、身貧なる我等が如何にもし

てと、二人して尾けつ狙ひついたしておざれど、手引なうては、事、容易に果し申すこと相能はでおざる。我等折入つての御頼みとは其處にあるのでおざる願はくば和殿も我等ともく、こたびの狩くらに御供しめされて、我等一期の本懐の手引をばいたし下さるまいか。親の仇をば近くに置きて、長く物思ひをいたさん悲しさに、斯くは兄弟申し合せて、罷り越しておざります。あはれ手引をばいたしたまはること、相能ひ申さぬでおざらうか』

いひつゝ十郎は、ヂツと其の顔を見送る。

(二五) 卑怯の與一

義心に乏しき與一は是を聞いて、以前の言葉には似もやらず、武士にあるまじき二枚舌、

『其の儀はフツ、リと思ひ諦め召され。今の世に於ては、左様なこと、御分等が

分際には、なか／＼に能ひ申さぬでおざらう。當世は昔と事變つて、親の敵、子の敵さては宿世の敵、何にてもあれ、人を殺めて私の遺恨を晴らすがごときこと、此の上もなき禁制でおざる。ましてや御狩の供をばなしつる祐經を討たんなどは、逆ものことでおざる。思ひ止まり召され。それよりは彼れが私歩きをこそ狙ひたまふこと、最上の策でがなおざらうと、與一は思うておざること申すもむげに斯くはいふのでおざらぬ、御分等の敵經祐は、御知り召さる通り、當時鎌倉殿の御寵臣にて、なか／＼の権力家、先祖の伊東を安堵するのみならず、莊園を知行すること數を知らず、且は敵ありと思ひ居れば、其の用心は思ひの外の嚴しさでおざる。なまじいなる事仕出して、御分等のみならず、母御や曾我の太郎殿をば惑ひ者になど、なし給ふこと、夢々あつては適ひ申さぬ。此の事以てのほかに、宜しうおざらぬ。強つて思ひ止まり召されよ。與一決して悪しうなことは申さぬ。能く／＼御心を鎮めて、お考へあれ』

表面に理を文つて制すると見せながら、裏面に卑怯未練な逃げ口上、見え透くやうな腰拔武士の與一が腸の腐つたに、呆れ果てたは十郎、五郎のみであるまい。與一は敢て、兄弟の頼みを容れん氣色もない。

十郎は是を聞いて、カラ〜と笑ひながら、

『さても憐ほしの人や。斯かる事はし、何條我等が思ひ立つべき。只、和殿が御心を見んために申せし迄、さりとは誠し顔に制せらるゝことの笑止さよ。今の話は我等思ひも寄らぬことでおざるわ……』

他人になと、ゆめ〜御披露めさるな。和殿の御恥ともなるでおざらうよ。ア

ツハツハツ………』

し、事に紛らして席を立つ。

弟の五郎は、それとも知らねば、

『さつても扱も大白痴の與一よな。初めの言葉にも似ぬ今の雑言は、臆病風に吹

かれてか。——如何なる大事なりとも心安う打明けよ。必ず頼まれ奉らん——と其の舌の根の未だ乾かぬに、何ぞや表裏千萬の今の雑言。さまでの腰拔武士とは露知らずして、一期の大事をば明しつることこそ口惜しの極みよ、腹立たし。烏獸すらも心あるに、さても面ばかりは人に似て、心の底は畜生か、重ねては物も言はじ、言葉も交すまじ。腸なしの腐れ武士め、宜うも此の言葉を覺え置け！』

散々に悪口をいひながら、
『あれほどの不覺人に、斯かる大事を打ち明かしたまへるこそ、兄者人の御心口惜しけれ』

と呟やき〜、十郎と共に、席を蹴立って立ち歸る。

斯くと聞いて、怒つたのは、三浦の與一である。火のやうに眞ッ赤になつてプン〜いひながら、矢底に馬を引き出してヒラリ鞍上に打ち跨るや否や、

『鎌倉殿に今のこと悉皆申し上げて、吠面かゝして呉れん。覚えて居れッ！』
 とばかり、馬の尻にウンと一つ喰はしたから堪らない。
 飛んだ處で意外の飛ツ沫を受けた與一の馬は、悲鳴を擧げて後蔭地、眞一文字
 に鎌倉をして駆け出す。

さてこそ一大事を起つたりな。

兄弟は夢にも、後にて斯かることが起りしとも露知らぬ。

(二六) 馬上の痴言

折柄、和田左衛門尉義盛と、畠山次郎重忠とは、從兄弟同志の間柄とて、同じ
 く三原野の狩くらに從つて、久しく彼の地方にあつたが、今度鎌倉殿が、それを
 中止して、鎌倉へ歸るに及び、共々頼朝につき從つて、立ち戻り來る。
 一ト先、我が家へ歸つて、日頃の疲勞を休めんものと、次郎重忠を呼んで、

『何のお愛想もなければ、せめては拙者方の湯風呂になど入浴られて、此の程の
 疲勞を休め身を劬はられては如何に……此の度の富士野への御供は、さる
 上のことにいたすとして、何はなくとも、先づ先づ、拙者方へ入らせられよ』
 義盛自から重忠を伴うて、鎌倉から、三浦の館へ立ち歸るべく、駒の鼻を揃へて
 今し、街道を馳せて行く。

と、材木座を過ぎて、小坪の坂へ差し懸つた時に、彼方の方より、是も同じく
 騎馬で馳せ來る二人のものがあつた。

見ると曾我の兄弟である。

互に挨拶をして、其の儘に別れる。

義盛と重忠は、四方八方の話をしながら、進んで笠摺峠まで來る。

すると又、一騎の武士に出遭ふ。

笠を煽つて、一散に馬を飛ばして來る。

重忠が見ると、自分の從弟に當る三浦の與一である故、早速に言葉を懸ける。
 『如何に與一、何處へ參らるゝ——周章てくさつた其の様子は——』
 『これは畠山殿でおざりましたか。我等、些と上へ急に申し上げたきことおざつて參つておざる。取り急ぎまするに依つて、是にて失禮御免の仕つる』
 眞ッ赤になつて、ブン／＼無捨苦捨に怒つてゐる與一は、駒の手綱さばきもいどろもどろになつて、一言、いひ捨てた儘、そそくさ行き過ぎんとする。
 その様子が如何にも不審でならぬ。殊には小坪の坂で、曾我の兄弟に行き遭つた時、氣の所爲か、二人のものが涙ぐんで居たやうに思はれるの故、今、此の與一が其の後より周章てくさつて、急ぎ行くのが、何か事あり氣に見える。
 明智の重忠は忽ち、それと察する。
 『さては曾我の殿原が、敵の事など言ひ出でたに、無情なや、與一が鎌倉殿へ訴へて、罪被せんの所存でがなあらう』

謹厚の士の重忠は、斯く思うと、默然それを見過すことを得ぬ。
 矢庭に與一の乗つたる馬の轡を、確固と握つて、
 『如何なることあつて、鎌倉へは行かるゝ。三浦に何事の起つてか、隠さず、此の重忠に申し聞かせられよ。拙者とても、其方とは血縁のあるものなるに、何の隠すことがある……』
 キツと其の顔を見遣りながら、グイと馬を引き戻す。
 義盛も何事であるか、能くは分らねど何れ何か由あつての事ならんと思へば、
 是亦、與一の馬前にヌツクリ立ち塞がる。
 與一今は如何んともなし得ぬ。
 『別の仔細にはおざりませぬ。先刻、我等方へ曾我の兄弟が參られて、親の仇工藤の經祐を討ち果さんがために、今度富士野の狩くらに御供ないたして、斯く申す與一に敵を討取る其の手引をば、いたし呉れよと申しておざりまする。我

等其の儀について、篤と利害のある所を説いて止めておざりましたが、兄の十郎こそ道理に服して思ひ止んだれ、弟の五郎と申すもの、まこと鳴濤の曲者にて、散々に我等を罵り、悪口をいたしておざります。實は其の砌り、直ちに彼奴を打ッ放して呉れるべきものではおざりましたなれど、何と申しても、相手は二人、此方は一人、そのうへ、彼奴五郎と申す奴は、尋常ならぬ大方の剛の者と聞き及んでおざりますに依つて、其の場は事なく相濟ましておざつたが、如何にも其の時のこと堪え難く腹立たしうおざりますので、此の上は右の次第を一々、上のお聞きに達して、彼奴どもの素ツ首、由比ヶ濱か、龍の口に懸けられるのをば、見て呉れんと存じ立ち、さてこそ斯くは鎌倉へ、急ぎ参る所でおざりまする』

と、口惜し氣に、馬の鞍の上にて地團太を踏みつゝ、ブン／＼いつて、事の次第を詳しく語る。

餘りの事に暫時は呆れ果て、居たる重忠、

(二七) 隠されたる他人情

『それは尤も千萬のことでおざる。男といはるゝ者が、身命を抛つて、大事を頼むとの口上を退けるほどの奴輩は、人にして人にあらぬ犬猫同然の痴者、五郎が申した一言は、まこと、道理でおざる。弓矢の法には——命を塵埃よりも輕も、名を千金よりも重くせよ——とこそ申して、武士の一命は晨にあつても、夕には無きもの。兄弟も頼みを聞き届け呉るゝ人と思へばこそ、斯程の大事を明して、其方に頼みつらんを、何とて快く承引ないたされぬぞ。初めに於て容易う受けがひながら、聞き終つての其の後に、兄弟が頼みしことを退くるなれど、其方といふ其方は、まこと、見下げ果てたる男かな。曾我の殿原は神妙なる者なればこそ、其方の命も全うしたれ、斯く申す重忠ならんには、やはか其

の儘に立ち歸るべき、其の場に於て、必ずや、其方ごとき表裏の武士は、打ッ
 放して捨つるでおざらう。よし又其方が、是より直ちに事の次第を鎌倉殿へ申
 し上げて兄弟のものを失へばとて、鎌倉殿も、一旦は、能くこそ告げしと、萬
 に一つ、仰せらるゝとも、親しき間柄ある者の悪事を申し出づるほどの武士を
 何條、神妙なるものよとは、よも、思し召されまじ。又例へ彼等を今失へばと
 て、曾我の殿原が一門のものは數多ければ、何とて其方に恨みを懐かぬものあ
 るべき。武藏、相模の一圓は、皆、此の殿原の一門にてあらぬものはおざらぬ
 思へば彼等兄弟が心の中こそ、推し量られていと哀れではおざらぬか。物の哀
 れを知らぬは眞の武士ではおざらぬぞ。たとへ、其の手引はいたさずとも、殿
 原が本懐を遂ぐることを、ゆめ、妨げめさるな。上へ訴へんなどは、以ての外
 の非事でおざるぞ』
 と、或は諭し、或は戒めて、與一の鎌倉行きを止めんとする。

和田左衛門尉義盛は、たゞ鞍の前輪に打ち伏して、ホロ／＼と男泣きに泣いて
 重忠の厚意に感じ居る。
 與一も今は夢の醒めたらんやう、
 『拙者はそれまでにと思ひ及ばなんだでおざる。まこと、今こそは口惜しう後悔
 しておざいまする。ふつつり、思ひ切つておざるほどに、御兩所とも與一が罪
 を御許し下されよ』
 と、流石に慚愧の思ひに堪へ兼ねてか、サと顔うち赧めて、首垂れる。
 『あらば……』
 とあつて、三人直ちに馬首を回らして、其の儘打ち連れ立つて、俱に共に、三浦
 の方へと歸り行く。
 同情の厚き情は、いつも、兄弟の後にひそみ居るのである。
 斯くとは知らぬ曾我の兄弟、由比ケ濱を過ぎ、稻瀬川を通つて、稻村ヶ崎、七

里ヶ濱と行くうちに、いつか、龍の口、片瀬川、相模川、戸上ヶ原、唐土ヶ原、平塚の宿などいふ所を過ぎて、早くも金屋川の大橋を渡り、大磯の宿に着く。

さだめなき浮世のならひ、十郎、此家にてつくんと物案ずるに、

『明日の日にも富士の野に出立いたさんか、再び此家に歸らんことは此の身の期するところでない。せめては、此の二年三年、淺からぬ契を結んだ虎に暇乞なりともして行かう……』

弟の五郎に此の由を語る。

五郎も是を聞いて、

『それは道理のことでおざります。此の時致も、化粧坂の麓に、聊さか情をかけた女のおざりするほどに、後刻、参り會はんぞ存じて居りしところ、兄者人には早々、虎御前のところへ、参られませい』
兄弟こゝに、右と左に袖を分つ。

(二八) 五郎の情事

五郎が情をかけた女といふは、化粧坂の少將といふ遊君。

此の度富士野の狩らに行かうへは、もとより生きて歸らんとは、露いさゝかも思はねば、餘所ながら永の別れを告げてなりと思ひし故、兄十郎と離れて、たゞ一人、少將の許を訪れる。

然るに少將如何に思うてか、敢て五郎に會はんぞせぬ。

五郎は不審に思うて、傍の人に、それとなく少將の様子を尋ねる。

『實は此のほど、梶原の源太殿が濱出の歸途、少將様のところにて一夜をお明しになられましたる處、翌朝、腰の物をお忘れになつて、外へお立ち出でになられましたる故、』

急ぐとてさすが刀を忘るゝは

おこしのものごや人の見るらん

と少將様がお詠みなされましておざります。源太殿は是を聞かれて直ちに、
かたみとて置きて來しもの其の儘に

返すのみこそさすがなりけれ

と返歌なされておざります。少將様は——さて此の歌の面白さよ——と思ひ染められて、源太殿の幽に優しいところにお心を寄せ、以來、ふつつりと、他の殿方には、お會ひになられないのでおざります。

と一人のものは斯く答へて、遠慮もなく五郎に語つて聞かせる。

五郎は斯くと知つて、

『流れに任す遊び者の彼女ゆる、もとより頼むべきではなけれど、さりとして世にある身の上なりしならんには、なごて源太ごとき輩に思ひ換へられはすまじきものを……さても貧は諸道の妨げとや、面白の言葉よ。人をも世をも、何

しに今は怨むべき……』

と、心ひそかに思ひながら

あふと見る夢路にとまる宿もがな

つらき言葉に又もかへらん

と、筆はしらせたる其の一首をば、あたりに引き結んで、其の儘、其處を立ち去る。

あとにて是を手にせる彼の少將は、打ち返し々眺めて居たが、やがて五郎が筆のすさびと知るや、

『君が一夜の情には、女子が百年の齡をも顧みぬとかや。時致殿が淺からぬ御情のほど、なにとて妾、是を餘所にいたすべき。流れに任す浮草の此の身は、さるを、恥とも知らで恥かしや、斯くあるしべとは露しらでありつることの、さてもく口惜しきよな。真ある武士は二君に事へず、貞女は兩夫に見へずとな

ん、そも如何なればこそ、妾は、斯くまで引く手数多の身とは生れし。口惜し
とも口惜し。恥かしとも恥かしよやな』

とばかり、五郎の文をば、其の顔に押し當て、さめくく泣き沈みつ、
數ならぬ心の山の高ければ

奥の染きをたづねこそ入れ

捨つる身に猶ほ思出となるものは

問ふに問はれぬ情なりけり

二首の歌は、彼女が然る善知識を尋ねて、生年十六才といふに、緑の黒髪を下
して、世を捨てし時のものであるとか。

墨の衣を身に纏うても、猶、五郎を思ふの情は纏綿として、盡きぬ名残を語り
つゝある。

勇猛無双の彼れ五郎の背後に、斯かる情事の、ひそんで居るを思へば、實に言

ひ知れぬ趣のあるを知る。

化粧坂の少將が許を去つたる五郎時致は、斯くして、遙かに曾我の方を眺めつ
ゝ、古宇津酒匂を過ぎてより、早川に到つて、伯母の館へど入る。

(二一九) 祐成を思ふ虎の心

折節、伯母聲の土肥彌太郎遠平も居たれば、

『此の頃は遠々しうおはしたに、能くこそ訪れめされておざるよ。御待遇は、え
仕うまつらぬほどに、心置きなく逗留したまへかし』
と、一同歡んで是を迎へ、懇ろに歡待す。

五郎は、毎度ながらの好意に、深くそれを謝しつゝ、

『この度、鎌倉殿、富士の野へ御狩くらに御出であるよし、承つておざります
る。あはれ御供申して、狩場の様子など、後の語り草までに、見て置かんと思

ひ立つておざりまするなれど、母には不幸の拙者、何事も心に任せ難うおざり
ますほどに、願はくは御召替の衣装なりとも申し受けんと存じ、今日、斯くは
推参仕つておざりまする』
と、言ひ出でる。

彌太郎遠平、是を聞いて、

『宜くことを仰せ聞けられておざるよ。こたびの狩くらは、又と見難きものでお
ざらるほどに、篤と見て参られませい。衣装のことは、何れなりとも、御目に
留まらんものを進上仕るでおざれば、御随意に御撰りめされ。鞍なども御望
みとあらば、遠慮なく御申し聞けられませい。御心に適ふとまでは行かずとも
我等及ぶ限りは、御用立いたすでおざれば、決して何事なりとも御心を置かせ
られませんな』

と快う、小袖の類、直垂の數々を取り出だして、五郎に撰り取らせる。

此方は大磯の宿にて、袂を分つた兄の十郎祐成である。

是を此の世の別れと、急ぎ虎御前の宿所まぢかまで来たが、折節、鎌倉殿の召
しに従つて、近國の大名小名どもが、打ち連れく通り行くのを見て、

『流れを立つる遊び者の彼女ゆえ、また我れならぬ人の情もや……』

と、流石に心許なく思はれてか、暫く傍に身を潜めて、それとなく虎が家の内を
見る。

屋内からは女の聲として、

『只今、上らるゝ方々は、何處の國の誰人にておざりまするか』

といふのが聞える、聲は、確かに虎御前である。

十郎、思はず聞耳引ツ立て、物蔭より是を窺ひ居るほどに、斯くとは知らぬ
遊女の誰彼れ、

『先陣に参らるゝは、横山の藤馬丞殿でおざりますよ』

と答へて、虎に語る。

『まことや孔子の言葉に、耳の樂しむ時には慎むべし。心の驕る時には、恣にすべからずとか、申されておざりませうと、あはれ、實に此の殿原の馬、鞍、さては鎧、腹巻など、妾に呉れたまはらば、如何にか嬉しかるべきに……』
虎御前の聲として、次第に沈み行くのが、十郎の耳には、千金の重みあるが如く響く。

と、並居る他の遊女の言葉を思しく、

『女子に似合はぬ其の御願物をば、何の御用にぞてか、御所望ないたされますぞ』

といふのが聞える。

十郎も、虎御前の異な願物に、いと聞耳澄して、其の答を待てば、さても可愛や、

『祐成殿に参らせんとて……』

と、後は流石に言ひ兼ねて、ハラ／＼と涙おとしつ、泣いじやくりゐる様子。

物蔭の十郎も、此の言葉に、

『さては、我等がことを斯くまでに思ひ呉るか、疑ひした非事ぞ、可愛なものよ』

と、同じく不覺の涙に誘はれる。

『さるにしても、如何でか、是程にまで、情ふかきものを、立聞したりと思はれては、後の恨みも残るであらう……』

と、早速に思案をした十郎は、やがて何家までも是を知らざる體にもてなしつ、何氣なく廣縁に駒を乗り捨て、持つたる鞭に傍の簾を拂ひ除けつ、

『久方にての對面よ。其の後は如何に……』

と、莞爾、微笑む。

(三〇) 和 田 の 人 々 一 門 の 酒 宴

虎は思ひも掛けぬ情人の見参に、たゞ「様——」とのみ、餘りの嬉しさに、暫時は言葉も出ぬ。

十郎、是を限りの語らひと思ふ故、平常よりも睦しく虎と語り合ふ。斯くて一兩日は、たゞく、あかね世の中の夢か現とばかり、かたみに思うて日を送りしところ、思ひの外なることこそ出来たれ。

事とは他にてもなし。

和 田 左 衛 門 尉 義 盛 が 一 門 の 人 々、百八十騎がほど、鎌倉殿の御召しに従つて、折柄同じく此の大磯の宿をば、打ち連れ立つて通り過ぎんとしたが、氣輕の義盛不圖心に思ふやう。

「都のことは、さても限りあれ、田舎にては、黄瀬川の龜鶴、手越の少將、大磯

の虎とて、此の三人は街道一の遊君と覺え居る。一献すゝめて通らんには、またの楽しみでがなあらうほどに、早々、長者が宿へ罷越すであらう』
と、乃ち、三十有餘人の遊君を呼び集めて、盛んなる酒宴を開く。
座に列つた面々には、朝比奈三郎義秀、古郡新左衛門、荏柄平太胤長などがズラリと義盛の左右に居流れる。

義盛は虎御前の見えぬに、聊さか興ざめ顔をなして、
「此の君達もさることながら、我等是へ参つたは、虎御前へ見参のためでおざるなどて此の席へは見えられぬぞ。義盛、折悪しく参り合はせてゝか……」
と、一人口のうちに呟やく。

虎御前の母、早くも是を聞いて、
「そればでおざります。此の程は煩はしうて、酒の席へも出でぬがちに居りまする。なれども折角の御事ゆゑ、只今、是へ呼び寄せるでおざりませうほどに

「ちやつと御辛棒な下されませい」

と、早くも其の席を立て、虎の居間へ來り、

「先の程も迎へしに、なとて早うは出で、たもらぬ。和田殿、強う御待ちめされ
ておざるを……疾くく入らせられよ」

と言ひ置いて、再び酒宴の席へ出る。

併し虎御前は、猶、其の姿を酒宴の場へ現さない。

義盛を始め、他の人々も、盃を控へて待つたが、虎の姿は、容易に見えない。

氣の荒い坂東武者の常とて、はや、座は白け渡つてしまふ。虎御前の母は氣が
氣でない。

「今しばらく……」

と言ひ置いて、とつかはと虎の居間へ來て見ると、虎御前は衣引き被いで泣いて
居る。

なだめつ、すかしつするその言葉も、

「流れを立つる此の身ほど、悲しうあるものはおざりませぬ。夫の心を思やらん
には、母者人の命に背き、母者人の御心に従はんには、時の綺羅に愛づるにも

母も、十郎が居るために、虎が其の傍を離れ得て斯くは酒宴の席へも出ぬのだ
と知つたものゝ、さりとして、時世に従ふが人の習ひ、

「なにとて早うは出で、たもらぬぞ。思はぬ人に馴るゝもさのみこそ、恨め
しの御振舞ばし、しめされなよ」

と、流石に強いてとも言ひ兼ねて、其處へ佇む。

十郎も見ると見兼ねて、

「此の祐成は、和田殿に大恩受けたるものぞ、早々座敷に出で、彼の人の機嫌
聞きてたもれ。我等ゆるに參らずと知れては、事態面白うおざらぬ、早う參ら
れい」

似たる………斯くにも妻が思ひは、亂れ初めける黒髪の、飽かぬ情けの其の悲しさ。さりとは如何なる罪の報ひにて、斯くは女子の身とぞ生れ來れる………』

とばかり、さらぬだに虎が涙を促すのみである。

十郎、あはれと思つたが、猶も、

『何かは苦しきことおざらう、一度は是非に座敷に出で給へ。母の命に背かんと、冥の照覽も恐ろしうおざる。いざ、速かに御出であれ』

と、頻に勧める。

(三一) 不測の災

斯くとは知らぬ和田左衛尉義盛は『今しばらく……』と言捨てたまふ、席を立

つて行つた虎御前の母が、待てど暮らせど、容易に虎を伴ひ來らぬので、聊さか業を煮やす。

居並武士の中の荏柄の平太胤長は、遂に堪り兼ねたか、

『當時鎌倉にて和田九十三騎の棟梁たる義盛殿の酒宴の席に、兎角の異議を申し立て、出で來らぬ虎御前、早々此の場へ罷り出でぬに於ては、是非に及ばず、引捕らへても連れ出すであらうぞ』

酒氣に乗じて、雷神のごとく打ち喚く。

虎御前の母は大いに驚いて、とつかはと此の席へ轉び入る。

『許させられませい。折節、曾我の十郎殿おはすに依つて、虎も出で兼ねておざりまするなれど、間もなう是へ參るでおざりませうほどに、今一時の間、御待ちなされて下されませ』

『何と申す、曾我の十郎が虎の許に居るゆえにな』

『そればでもちりまする』

『怪しからぬ彼等が振舞かな。虎は流れの遊君にてあるものを、何とてふさぐこ
とやある。出でぬとあらば用捨はなさじ。無理にも我等是へ虎を引出すであら
うぞ』

氣早の誰彼れ、席を蹴立つて、走せ出でんとする。

『アイヤ方々、御騒ぎめさるな。曾我の殿原とあらば、我等心安うおどるもの、
何とて事を引起すの用やあるべき』

義盛、ざはめく人々を制しつゝ、傍の朝比奈三郎義秀に打ち向ひ、

『如何に三郎。早々、十郎殿を是へ迎へて參られい。我等如何やうなりともして
虎御前を此の席へ出させるであらうほどに、急ぎ十郎殿を案内いたせよ』
と早くも命じる。

物越しに、斯くと此の騒ぎを聞き知つた十郎祐成は、

『不思議やな、思はぬ最後の出で來れるよ。身に思ひのあれば、我等が一命は千
金萬玉よりも貴きものを……』

と、不慮の難儀に、兎やせん斯くやせまじと思ひ千々に亂れたなれど、又せん術
もない。

手早くも頭に戴ける烏帽子をおしなほしつ、直垂の露、引き結んで肩にかけ、
伊東重代の赤銅造りなす大刀の鯉口ブツツリ、二三寸が程を抜きかけて、片膝お
し立て、一方の扉を開き、

『ことごとくしや、和田のものども、何十人にもあれ、眞つ先がけて一番に入ら
ん朝比奈が諸脛まづ薙ぎ伏せて、然る後に續かん奴原は、何條、ものゝ數にや
あるべき。伊東が手並みのほどを示して呉れん。來れや和田の輩、祐成相手に
なつて得さすべし』

とばかり、事を好まぬ十郎ながら、今は仕方なく、覺悟を定める。

虎も此の様子に、實にや冥途より来るなる、獄卒の追つ立つる道だにも、主君
 師匠の命には、かはるぞかし。況してや、夫婦恩愛の契り淺からずとは、古、今
 までも傳へ聞くなるものを、後の世までも離れじと、是亦、思ひ切つて、守り刀
 を衣の褌にと取り含み、和田の人々、如何に勇み亂れ入るとも、縦横無盡に立ち
 廻つて、宜き機會うかゞひ、たゞ一刀のもとに當の義盛を刺し殺して、あとは如
 何やうにも相成るべしと、決然、心を思ひ定めつ、祐成の近くに引き添うて、今
 や遅しと待ちかける、心の中ぞ幽に、いとも優しきことの極みなる。

(三三) 十郎義盛の對面

此方は義盛の命を受けた朝比奈の三郎義秀である。
 祐成の居間まぢかに迄、摺り寄つて來つたが、心の底に思ふやう、
 『十郎は伊東の嫡々である。今こそ、身貧に暮らすとはいへ、もとより悔るべき

ものにてはあらぬ。迂濶に、彼が居間へ押し入つて、脚など脛など、打ち拂は
 れんも、三郎義秀が身の不覺である』
 と、手にせる扇を、早速の笏にと取り直しつゝ、間の襖間にピツタリ畏まつて
 『アイヤ是に曾我の十郎殿、御入りの由、父にておざる和田左衛門尉義盛うけた
 まはつて、御迎へのため、三郎義秀を參らせられておざります。何かは苦し
 かるべき、速かに御出であつて、親にておざる義盛に御對面な爲し下されます
 るやう、且つは猶ほ、拙者が一期の所望のおざります。虎御前の御事、義盛
 うけたまはつて、ゆかしきことに思はれておざりますなれど、御座を存じて
 義秀申し止めておざります。さりながら、然るべくは御兩人諸共に御出であ
 つて、一つには父が所望をも叶へ、一つには、義秀が身の面目を施すやう、御
 計ひ下されませい。一向に頼み入り奉る』
 と、言葉やはらかに、物靜かに言ふ。

十郎聞いて、心を和らげ、

『左右にや及ぶ朝比奈殿、いかでか異議のおざらうや。我等祐成、只今参るほどに、先づ和田殿に宜しく申して給はれよ』

と、やがて烏帽子の筒を押して立て、直垂の衣紋ひきつくるひつゝ、外に立ち出でる。

虎も是非なく、姿を整へて、心ならずも従ひ行く。

まこと、其の腰は楊柳のごとく、なほやかに、面ざしは、雨の朝の海棠にも似たらん風情、居ならぶ面々の瞳にも、流石、絶世の美女と映じる。

義盛は虎を見て、我心得たりとばかり、

『さても思ひ掛けなき十郎殿かな御分是にあると知りつらんには、早々見参に入るべきでおざつたものを、何とて斯くは他所がましう、御心を距てめされしぞ疾く〜是へ進まれよ』

招ぜらるゝが儘に、十郎、五歩六歩前に進んで、笏とりなほし、

『さればでおざりまする。疾くに御目に掛るべきでおざつたなれど、我等殊の外異體の無骨でおざりまするほどに、罷り出で、おざりました次第、平に御免な下しをかれましまするやう』

色代すまして、右手の方の席に居直る。虎も同じく、十郎の側へと寄り添ふ。

義盛、つくづくと虎を見て、

『聞きしは、まこと、物の數ならね、世には斯かる美しいの女も居ることよ。祐成の心を兼て是へ出でざつたは、幽に優しくこそ覺ゆれ』

と、口のうちに吐やき〜、盃とつて、

『先づ〜……』

と十郎にさす。

祐成、是を干して、三郎にさす。義秀、干し終るや、盃は面々の人々に廻つて

果ては、思ひざし、思ひ取りとなつて、何時か酒宴は亂舞となる。

以前の盃は、此の間に、再び虎御前の前に置かれた。

側に控へた一人の武士、此の時に

『いかに御前、その盃を何れへなりと、思し召さん方へ、思ひざし、したまへ。是ぞ誠の心ならんに……』

と、戯れにいふ。

一座の面々、こは面白しと、直ちに和して、

『さればこそ至極の思ひつき。其の盃を差されしものは、こよなき果報者である。何れへなりと、思し召さん方へ、思ひざし、したまへよ、虎御前』

と、各々、酒がいはする鬨り言。

十郎の面には、期せずして人々の瞳が、一樣に注がれる。

(三三) 戀 の 盃

虎は、七分に受けたる盃を手にして、胸の思ひを千々にと碎く。

和田に差さんか、時の賞玩なれば、もとより何の異議もあるまい。なれど虎の身としては、祐成のおもわくも耻かしい。よし流れを立つる身だからとて、睦みし人を打ち捨て、此の席へ出づるは、すでに自分の本意でない。然るを況してや、斯く言はれた盃を、目のあたり、他人へ思ひざしすること、綺羅に愛でたりと思ひなされんも口惜しい。さりさて意中の戀人祐成に差さんか、人々の機嫌を損ぜんこと、火をみるよりも明らかなである。

『斯くあるべしと知りつらんには、疾うに始めより、出でもせでありつるものを再び、物おもふとは、さても〜悲しきことの定めよ。さもあらばあれ、思はざる事あらん其の時は、和田殿の前さがりに差したまふ刀こそ、妾がもの。何』

處までも支ゆる體にもてなして、奪ひ取り、一刀刺して、俱に相果てん。こにも斯くにも、心の儘にこそ』

と、決然思ひ定めし虎御前は、やがて義盛を一目、祐成を一目、しばし、心をつかひ打ち案じたその末に、

『許させられませい。さりとては思ひの方を……』

とばかり、焉然微笑んで十郎に盃さしつゝ、流石に下うつ向く。

義盛は、自分にこそ……と思つて、心待ちに待つた目途が外れたので、聊さか不満の氣味だ、苦い顔して、黙つて見て居る。

面々の人々も、是れは……と互に目と目を見合はせて、言葉も出ぬ。

十郎は件の盃、取り上げて、

『拙者、賜らんこと、まこと狼藉のいたり。御前にこそいたすへきでおゆると、キツとして、義盛の方に差さんとする。』

義盛聞いて、

『志の横取は無骨でおざる。いかでか左様のことおざらうや、はやく御干しめされよ』

といふ。

十郎やむなく、盃とりあげて、三度がほど酌んで干す。

見せつけられた面々の者達こそ、宜い面の皮だ。てもなく虎御前の惚氣を見て居るのだから、大いに癢に障らざるを得ぬ。例の平太胤長は遂に堪らなくなつたか、威丈だかになつて我鳴り出す。

『無禮なり虎御前、たとへ祐成殿の愛ほしくとも、和田殿に差してこそ禮なるを私の振舞いたすとは、何としてぞ。十郎殿をもてなす席にてはなきに』

大眼を剥き出して、以てのほかに立腹する。爾餘の人々に於ても、

『沙汰の限りをなす女かな。次第によらは捨てゝは置かぬぞ』

と、嫉妬つ腹を立つて、ブン／＼いきり出す。

酒宴の席は、忽ちにして白け渡る。

義盛は苦々しげに色をなして、

『さて／＼年ほど物憂いものはあざらぬて。我等が齡、いま二十だにも若かりつ

らんには、何とて斯かる目に遇ひ申すべき。よしや一旦は、たゞへ嫌はるゝと

も、斯程の思ひざしをば、他所へは渡さじものを、あゝら南無阿彌陀佛や、南

無阿彌陀佛や』

と、述懐する。

十郎もとより沈着の男にして騒がぬ性質なれば、

『何ほどの事がある。事いで来なば、何十人にもあれ、義盛と引つ組んで、最

期の勝負を決せんまでぞ』

と、思ひ切り、嘲み笑つて悠然さしひかへる。

さるほどに曾我の里なる弟の五郎時致は、折ふし、亡父祐泰のために経誦しつあつたが、虫が知らすか、頻りに胸騒ぎがしてならぬ。

『東國の武士ども、鎌倉殿の御召しに依つて、富士の野へ罷り出づる今の折から

ても心得ぬ此の胸騒ぎは、何としてぞ。いかさま兄者人は大磯に越し給ひつる

が、流れの遊女ゆゑ、事など仕出しめされてぞか。心もとなき此の胸騒ぎよ』

矢庭に、サツと帳臺に走り入るや、用意の緋緘しなせる腹巻おつ取つて、身に

引つ懸け、伊東重代四尺六寸の赤銅造りの大刀をば、しつかと十文字に結び下げ

つ、鞍置く暇もなければ、探馬にと打ち乗りさま、二十餘町のその程を、たゞ一

虎も同じく、十郎の身體まぢかに引き添うて、ことや出で来なんと、心する。

(三四) 夕日脚の太刀影

門外を見渡せば、長者の門のほとりには、鞍置き馬が、雑然、一二百疋ばかり
繋がれてある。遠侍には、物の具の音が騒がしう、騒然と聞える。
さては………と五郎、今は何の猶豫するところなく、轟然に虎の居間へ押し
進む。

『十郎殿は如何に……』

心も息せき、戦く一人の遊君に問へば、

『和田殿と盃を論じて、あの通り……』

と顔色變へて言ふ。

『さればこそ………』

五郎、早速に身を躍らせて、間の透垣跳ね越え、飛び越え、兄の聲を便りに、
酒宴の座敷間近に寄り進む。

障子一重に、内部の様子は知れねど、何様事は由々しき一大事、時致是にあり

と、知られんために、持つたる筈ブツツリ、障子越しに、十郎の袴の附け際を刺
す。

十郎『誰ぞ』と問ふ。五郎、小聲になつて、

『時致參つておゐる』

と答へる。

聞くより祐成、千萬騎の兵を後に持つたるよりも、猶ほ心丈夫に思ひ、ホツと
ばかりに打ち喜ぶ。

時しも義盛の聲として、

『上もなう振舞ふものかな』

と聞える。

五郎、さては兄者人のことよと心得て、一の太刀に當の義盛、二の太刀には、
朝比奈の三郎、其の他の奴原何十人にもあれかし、たゞ一刀のもとに、打つ放

して呉れんごばかり、四尺六寸の大刀を杖に突き立つて、ヌツクリ忍び兼ねたる

其の有様は、まこと毘沙門天の悪魔降伏よどこそ思はるれ。

折から夕日脚のことして五郎の太刀影は、ハツキリと障子に透いて見える。

と、目早くも是を認めたまつた三郎義秀、

『さてや彼等兄弟は、兄が座敷にある時は弟が後に立ち添ひ、弟が座敷にある時は、兄が後に引き添ふごか。いかさま此の物影は、五郎とこそ覺えたれ。さしたる事もなきに、大事など引き出して、何の益かある。さりとは親しき彼等兄弟の仲よ。羨ましや』

と、何氣なき體にもてなして席を立ちつゝ、紅に月を出せる扇面打ち開いて、

『何とやらん座敷も静まつておざる。御謠へめされ殿原。拙者、一とさし舞ひを仕つるであらうほどに……』

と、拍子打ち立て打ち立て、

君が代は千代に八千代に細石の

と、しぼり上げて

巖となりて苔のむすまで

と、短く舞ひながら、サツと五郎が立てるその前の障子を引き開ける。

(三五) 五郎と三郎の草摺引き

果して時致は、四天王を造り損じたらん様子して、縁側にむんづり、踏みはだかつて居る。

三郎義秀、さてこそ……と、猶も狂言に取り倣して、

『客人ましますぞや。まづ、此方へ入らせられい』

と、草摺二三間、むづとばかりに取つて引く。なれども五郎は稀代の剛力、いつかななくビクともせぬ。義秀、焦慮つて、

『磐石なりとも、やはか此の三郎が手を懸けたらんには、動かぬ事やある……』と、力に任せて、曳やくと引き争ふ。

五郎ものとも思はず、是をば、引くともなく、引かるゝともなしに、莞爾と笑んで立ちつくす。

横縫の草摺は、此の大力に怵へ得で、やがてのことにブツツリ、一度に断ち切れる。

はづみを喰つた義秀は、我と我が力で、ドターリ、後に引繰り返る。

五郎は微塵も動かず、依然、仁王立ちにぞ突立ち居る。

力が何處まであるのか解らない。面々の人々は、たゞ、ひた呆れに呆れ返つて居るのみである。

倒れた朝比奈は是を動機に、

『此處は女子どもの一座でおざる。早々酒など盛るでおざらうほどに、時致殿に

も一献御酌みめされ』

と拔らず言葉懸ける。

五郎さらばと、

『あまりの辭退は無禮の至極、異體は御免な下されい』

四尺六寸の大刀片手に、着たる草摺遠慮もなう、末座に控へし面々の、或は頸のまはり、或は顔のあたり、ゴツツゴツツ、打ちつけ打ちつけて、義秀が下手の方の畳の上にと居直る。

朝比奈いそぎ席を立て来て、義盛の前にあつた盃を、五郎の前に置く。

時致これを取上げて、酌に立つたる三郎に色代しつゝ、

『御盃の前後は遅参の無禮でおざる。御免下されませい』

と三度まで乾す。

義秀、

『その盃、思ひ取り申すでおどらう』

と、是亦三度乾して、虎に差す。

盃は虎より、再び義盛に返る。

五郎その折を計つて、

『今しばらくも御席に列るべきではおざれど、曾我にさし當る用事もこれあり、

且つは母人も案じておざるほどに、是にて御暇を仕つる。方々御免』

兄十郎ともろともに席を立つ。虎も續いて、此の場を退く。

斯くて兄弟二人、曾我へ歸らんとする。

時に十郎、静やかに、虎に向つて言ふ。

『豫て聞き及んでもある如く、我等富士の野に、御供申さんと存じておざる。なれども衣裳殊のほか汚れて見難うおざれば、御事曾我に來つて、直垂、小袖な

んど洗うてはたもらぬか。頼む人として、我等ほかには持たぬで……』

虎に何とて、否やのあるべき、直ちに伴はれて、兄弟の里に到り、十郎の衣裳など濯ぎつ、洗ひつする。それもこれも世に男こそ多かれ、夫と頼むは、たゞ此の人一人のみと思へばこそ。

十郎つくづく、此の様子を見て、

『斯くして我等が衣潔めんも、今ばかりにあるものを、さりさては哀れの女よ』

思はず不覺の涙をホロリと膝に落す。

目敏くも此の有様を見たる虎は、

『何とて妾の顔を御覽じて、其様には御泣きなされておどりますぞ。思ひも寄

らぬ讒言まかりごとなど申しつる人おどつてぞか。聞かしてよ様……』
女の常なんつねの心弱こころよはく、はや顔打かほうちち赤あかめて訝いより問とふ。

(三六) 曾我の里なる想思の二人

『さては既に悟さとられてか』

十郎じゅうらう、心中しんちゆうに周章あはてつゝも、

『いかで然さることのおざらうや。此程このほどは別わかけて世よの中なかの味氣あぢきなう覺おぼえて、身みの行ゆ末すえも心許こころもとなく、年頃としごろの契ちぎりのほども哀あはれに思おもはれておどるに依より、斯かくは不覺ふかくの涙なみだを流ながしておどる。且かつつは此度このたび御狩みかりの御供みとも申まうすにつき、思おもはぬ野越のこしの矢やになと當あたつて、朽くち果はつる埋うれ木ぎと相成あひならんも圖はかりがたく、それや是これやに、つい、女々めづしくも、涙なみだの落おちておどる』
それとなく言いひ紛まらして、

『身みこそ貧ひんに生うまれたれ、鬢びんなる塵ちりの見苦みぐるしさよと、人々ひとびとに蔭口かげぐちせられんも口惜くちあしうおどる。髮かみ梳くしりしてたもらぬか』
と、虎とらの氣きを外そとさんとする。

『さなくとも、髮かみ梳くしりは妾わらわがなすものを………まこと心細こころやすきことを仰おほせらるゝものよ。狩場かりばの御おんこと、左様さやうに思おもひ召めさるゝならんには、這度このたびの御供みともはみあはしてたもれ、喃のんう、様さま。妾わらわ斯はくと聞きき申まうしては、何なにやら心許こころもとなうて、心許こころもとなうて………身みも世よもおどりませぬ』

涙なみだながらに、言葉ことばやさしく搔口かきくち説ときつ、虎とらは鏡臺きやうたい取とり出いだして、祐成すけなりの後うしろへ廻まり、髮かみ梳くしる。

鏡かみに映うつる其そのの面おもてを打うち眺ながめた十郎じゅうらうは、

『さても不ふ便びんの女ものよ』

と思おもふと、又またしても思おもはず、せぐりくる涙止なみだとどめあへず、ホロリと膝ひざに落おす。

虎も虫が知らずか、髪梳るその手を止めて、

『今日に限り、御涙の心許なさよ』

と、理由は知らぬながらに、共に泣く。

十郎の不便さは、いや増さる。

『斯程までに思ふものを、此の心打ち明けぬとあらば、哀れの至極、とはいへ、女子は兎角に言ひ甲斐なきもの。別れの悲しさに、母になど告げられんか、事は破れぞ。何事も、ひた隠しに隠して置くに、若くはあるまじ。さはれ、打ち明かすこともなくて、我等相果てなんには、彼女が後の恨みも深かるべきに………明すべきか、明すまじきか』

思ひは千々に亂れて、とさま、斯うさま、獨り、心に思ひ煩ふ。

やゝあつて、十郎やうやくに決心する。

『思へば、祐成が身の行末ほど、心許なきものはおざらぬよ。斯く申すも女々し

うおざれど、言はねば流石、我等も物憂うおさる。打ち明けて語り申すほどに聞きてたまはれ。我等最前より、不覺の涙落せしも、外の事にてはおざらぬ。まこと、鎌倉殿御敵の孫として生れし我等は、御事も知らるゝ如く、今にその御憎しみ、浅うはおざらぬ。さきに相傳の所領を没収せられて別に懸命の土地とても所領ないたさず、この年にいたるまでも、尋常の馬一匹をだに飼ひ得ざるその果敢なさ。鎌倉殿の御代、年々に繁昌するに引き替へ、我等が行末は、日々に零落いたすのみでおさる。斯かる有り甲斐のなき此の身の仕儀に、何とていつまで髻つけて、人々に見えられうか、面ならぶる便りもおざらぬわ。人の見聞きも、なんぼうか耻かしようおざらうて。我等こたびの御供を最後として出家遁世なした上、墨の衣を身に纏ひ、頭陀乞食してなりと、亡き父の菩提を弔ひ、かたゞ我が身の後世をも助からんとキツと思ひ定めておさる。されば此度こゝを出で立つては、又再び歸らんと願はず、今生にて和御前と相見ん

ことも、是を限りどころ思ひ切つておざれ……』
 暗にそれとなく、心にもなきこと語り聞かして、別れを告ぐれば、虎は餘りのこ
 とに、犇と十郎の膝に取り縋つたまへ、とばかりに身を震はして悶え泣く。

(三七) 初めて明かす一期の大事

『さても殿御の御心強さよ、斯ばかり深う思し召させられながらも、問ひ参らせ
 ずば知らせじとこそ、思ひなされ給ひてでか。まこと、妾は大磯の遊女、あさ
 ましき者の子なれば眞の道は知り参らせじ。……
 なれど操おざります。虎には二つの心、おざりませぬ。様に見えてより以來
 早、三年がほどになりますれど心をも身をも任せ参らするは、様のほか、誰
 一人とておざらぬものを、何とて、妾ひとり、此の妾にて生き存へ申すでおざ
 りませうや。様御髪を剃りこぼちめされなば、妾とても同じく此の髪を剃り俱

に墨の衣に身をやつして、一つ庵に世を送り、一佛浄土の縁となり奉らんこと
 こそ、望にて侍れ。よしや外々の處に庵を結びてなりと、様の衣も濯ぎ参らす
 べく、香を御供へめされなば、妾花を摘み、薪を拾ひ給はゞ、阿伽の水をも掬
 びてなりとして俱に供に一つ蓮の縁を願ひ申すでおざります。その睦みをも
 呑み給ふとあらば、山々寺々を修業ないたして、餘所ながら、様の御姿見奉る
 べく、そも御許しあらじとならば、是非もおざりませぬ。淵川に身を投げて妾
 一日片時たりと、生き存へは、え仕うまつりませぬ』
 女氣の一途に思ひ入つては、また他事もなし。
 思ひは胸に迫つて、妾、何事もおざりませぬ。たゞ諸共に出家して、何所の涯
 など、連れて行きたもれ。さなくば死して來世を御待ち申すべきか。母上に先
 立つ罪は輕からねど、それも是も是非おざりませぬ。妾は妻ぞと思ふもの、夫
 に任すは此の身の上、など流れの身なと思ひ給ひぞ』

搔き口説き、搔き口説きして、又も涙に搔き暮るれば十郎が膝のうへは、まこと、虎の涙に浮くばかり。

祐成つくくと思案して、ホツと我れにもあらぬ息を吐き、

『これほどまでに思ひ入つたる志を、露ばかりも知らせずして、心強くもあし隠さんか、後の怨みも嗚な深きにあらう。知らせたりとて、よも人には披露もなすまじ。思ひ出づる折りに、念佛の一遍も申して、回向し呉れば、我が身に取つては無量の功德。人に漏らすなと口止めせんには、何とて空にやなすべき。知らして、彼女にも因果を含めんには若かし』

思ひ定めつ、流るゝ涙を袖に受けて語り出づ。
『世にも嬉しき和御前が志かな。祐成、今は何をか包み隠すべき。構へて、人にな漏らしたまひぞ。祐成、今に於て道心も起らず、出家とならん心もおざらぬ。年ごろ我等兄弟に思ひありとは、和御前も既に存じめされておざらう。此の

度の御狩を幸ひ敵の祐經を討つて、父の無念を晴らさんの所存、さてこそ御供をも仕るのでおざる。死に行かん身の、生きて還らん心は、ゆめおざらぬ。今生にて逢ひ見んことも、まこと、今はかりとこそなつておざる。和御前と逢ひ参らせてより、最はや、三どせの年月をこそ経たれ、たゞの一度も悦ばせ参らせしことなきは、祐成身に取つて此の上もなき口惜しさでおざる。御事が志のほどは、十郎、なんぼうか有難く思ひ存づれ、我等風情のもの、まどまどしく頼む所とてはなきに、何に依りてか露の情に引き替へて、三年が間の顔の、變らぬ色は常盤山、おのれ鳴きてや時鳥、憂き世の夢か朝顔の、はかなくならん身の程を、耻ぢす忘れぬ情の袖、前世のことは言ひながら、過ぎにしことの耻かしさ。君に奉公せぬ身なれば、恩祿はもとより蒙らず、身に營業とて、おざらぬほどに、御恩の時とも言はれず、利のあらん時とも言はれず、たゞ、思ひ出のなきことをこそ思ひ出してたまはれよ。和御前が情は、

祐成いかでか、後の世までも忘れ申すべき。今こそ更めて、心よりの禮を申すのでござる。我等なき後は、折りを見て一遍の回向なしてたまはれ。祐成今生の頼みでござる……………」

始めて明かされし戀人が胸中の秘密、今は露ばかりも疑はんやうはない。

(三八) 名残りの一夜

虎はせき来る涙、拭ひもあへず、絶え入る思ひを怵へに怵へて、

『よくこそ斯程の大事をば、明かしては下されし。いかにはいたなき遊女の妾とて、何しに人に漏らし申すことやおざりませう。一人まします母御にだも、御耳に入れ奉らで、心強くも振り捨てられて、思し立たれし此の大事、數ならぬ妾ごときが申せばとて、御止め奉ること、よも叶ひはいたしまするまじ。さるにしても斯程の大事をば、ようも心置きなく知らせたまはりしこと、返

すんくも心嬉しうござりまする。とはいへ世を捨てんと仰せ給へるだに、膽の潰れであるものを、世を去り給はんと聞きて、妾、いかに心に忍ばるべき。飽かぬ別れの道こそ、さても悲しきことの極みなれ。あゝ、何とせん、如何にとやすべき……………」

堪へんにも堪へがたく、諦めんにも諦めかねて、聲をも惜まず嘆きつ、悶えつ、泣き悲しむ。

十郎、慰めんにも慰めがたく、ともくくに涙を拂ふ。

『人もこそ聞け、あまりに嘆きたまはれな。名残りは誰しも同じ心にてあるものを……………」

鬢の毛少し切り取つて、

『是を形見に參らすほどに、祐成とも思したまへ』

虎に渡せば物をも言はず虎は是を小袖の褌に入れつゝ、又も泣き伏して正體もな

い。

互ひに百年の後までをこそ契れ、なごか一朝の別れを期すべき、思ひがけねばこそ、嘆きも深く、今生にて又相見んことも、是を限りと思へば、千夜を一夜に重ねても、明けざれかしと猶ほ願ふ、比さへ五月の短夜の、有明なれば宵の間の待たるゝほどもなければや、出づると見てし其の儘に、傾く空も怨めしく、八聲といふも鶏の、夜やうりふると明けやすく、夢見るほどもまどろまで、東にたなびく横雲の、東雲しらむ憂き枕、まだ陸言の盡きなくに、夜一夜をば泣き明かし泣き明かして、猶ほ飽かず、夜あけて後も涙更に堰きあへぬ。

十郎、斯くてあるべき事にあらねば、

『後生にて参り逢はん』

と、消えもや入らんばかりの虎を勵ましつ、なだめつして、是を介抱する。

虎は泣くく、着たる紅梅の小袖を脱ぎつゝ、

『我が身を放さぬ形身ともして、是を御膚の小袖に召し替へ給ひてよ』
暇を告げて、大磯に歸らんとする。

十郎、ふかく喜んで、

『今こそ限りの別れなれ。心のあらば移り香よ、暫し残りて憂き別れ、慰むほど

も面影の、着換へし衣に留れかし』

日頃着馴れし目結の小袖と、着換へて、虎に取らせる。

斯くて又もや暫し、諸共に涙ながらの別れを惜しむ。

(三九) 涙 の 訣 別

さるほどに幾萬世を重ねても、名残は盡きず、祐成、茸毛の駒に、貝鞍置かせ
是に虎御前を搔乗せて、

『道まで送らんほどに、早々歸られよ。名残は、いつの時にも盡くるものにては

なきに………」

同じく他の駒に跨がる。

『和御前よ、聞かせ、我等此の三年がほど、大磯に繁々と通うてあつたれど、この駒ならずば此の鞍を置き、この鞍ならずば此の駒に乗つて、和御前が許まで行きやつたれ。今日を限りの別れにてあるほどに和御前此の馬鞍を留め置いて我等が永の遺品とも思ひたまはれ』

轡を並べて送り行く。

折から五月の空の晴れがたきに、たゞさへ濕りがちの二人の袖は、音もせずして降りかゝる黄梅の時雨に、いや濕れ増さる。

——五町——十町——

離れがたなの縁の糸に、ひかれ〜て、十郎いつか曾我と中村との境なる山彦山の峠まで送り来る。

『いつまで送り参らせうとて、名残りは盡きぬ。さらばである』
駒を控へて、祐成、やるせなの涙のうちに立ち止まる。

虎は得たへず、

『いま暫し……』

とばかり、言葉もなくて、又も涙に泣き咽ぶ。

流石の十郎も、此の有様に暫しがほどは去りも得ならずあつたが、遂に、

『いざ、さらば……』

と決然、思ひの残る虎が涙の袖を振り切つて、此處を引き返す。

別れの道は、力も及ばぬ。互に顧りみ〜て急がぬ駒にも早ほど遠く、かすかに見えし姿さへ、次第に見えず隠れ行く。

『様を見奉らんも、是や今ばかりの御名残、何事をもと、言ひたかりつるを、涙にくれて宜う言ひえも盡さず、暇乞ひたまへるにさへ、返りごとを露なさざり

しよ。あはれ、今一と度呼び返し奉りてたべ。物なと一言申し侍らんに……

虎は思ひに思ひ切れず、馬の轡を取れる十郎の郎黨道三郎に、泣く泣くいふ。
物の哀れは彼とても知る。急ぎ走り行いて遙かの十郎を呼び返す。
祐成、堪らず、又もや再び此處に立ち戻つて、虎と駒を並べつ、愁然として立つ。

晴れやらぬ空は、曇りに曇つて、絹糸のごとき時雨は、縷々として降りしきる雲、低く、風は冷やかである。

虎は涙に眼も暮れて、思ひ設けし言の葉の一と言さへ、今は嘆きに失せ果て、言ふべもあらぬ。鞍の前輪に打ち伏して、たゞ、ヨ、とばかり泣くのみである。引き返した十郎も流石に言葉はなくて、是も同じく、たゞ涙のみである。時雨は、いつか歇んで、又、降る。

『別れともこそなけれ、別れずしては、濟むべくもおざらぬよ。來世をこそ待ちたまへ。さらばぞ』

果てしなれば、十郎、心を鬼にして、駒を引き返す。

『様——様のう……』

泣いて涙に叫ぶ虎女の聲は、千の刃に身を切らるゝよりも猶ほ辛けれど、十郎、心強くも此處を去る。

互の身こそ前に行け、心は後に牽かれつ牽れて、ひと足行つて振り返り、二た足行つては後振り返る。

見返り見返るほどに、何時しか無心の山は二人を隔て、路は曲りに曲る。

戀ひつ、戀はれつした互の姿は、遂に見えずなる。

轡を取れる道三郎も、流石に虎を慰めん慰むるの言葉なく、たゞ、同じく泣きの涙で、大磯に送りどゞける。

(四〇) 小 袖 乞 ひ

斯くて此方は十郎祐成、思ひはそれと同じ、曾我の里に立ち歸つても、猶ほ物悲しさの涙は収まらぬ。獨り愁然として、暫し我れもなく思ひに耽る。

折柄、早川の伯母の許より、弟の五郎は歸り來る。

『何事のおはしてぞ、兄者人』

涙の滴に、異しと見てか、心許なげに訝り問ふ。

十郎、やう／＼に涙を抑えて、

『年頃、住み慣れし此の館に居るも、今、一時が間と思へば……』

と、流石、五郎の手前、心耻しくや思ひけん、それとなく言ひ紛らす。

『さるにしても五郎よ。こたびの事、少しも母者人には、告げいで出で立つべきでおざらうか。御事は如何にと思はるゝ？』

十郎フツと言葉を變へて、如何にぞと思ひ掛ける。

『もごよりでおざります。兄者人には、さまでに御心弱うおはしてか。古より死なんとて立ち出づる人の子のいづくに母に知らせて、死出の暇を乞ふもの、おざりませうや。死ねとて勸むる親のおざらばこそ、必ず引き留めんは定にて』

あざりまするものを……たゞ何事も固く／＼秘め置かせられてよ』
十郎も、もとより其心なれば、敢へて否やのあるべき筈はない。

五郎は重ねて言ふ。

『時致に於ては、いづぞや母者人の御勘氣を蒙りしまし、未だに御赦免の沙汰を蒙むらいでおざります。此の儘にて相果てんこと、まこと今生、後生の憾みでおざります。言葉にも、三千の罪科、不孝を第一とするこそ、承つておざりませぬ。父者人に對しよし微志を捧ぐるとも、母者人に不孝にして世を終らんは、我等、如何にしても忍びがたうおざります。あはれ願はくば、此の』

時致のために、母者人に御申し詫びしてはたもらぬか、兄者人」
 十郎聞いて、數多たび、點頭く。

「然でおざつたよ。然でおざつたよ。我等も其儀に就いては、疾くこそ思ひつゝ、あざつた所でおざるなれど、宜い折りもなうおざつたので、今日まで過ごして来ておざる。さはれ若しも今にして是を過ごさんか、又いつの日とてかおざらうや。我等即刻是より、御事のこと、母者人に申し上ぐるでおざらう。來ませ此方へ。御詫びいたして參らするのでおざらうよ」
 五郎を伴ふた祐成は、もろともに、母の居間へと這入り行く。

「御事は暫らく此處にて待ちたまへ」
 十郎只一人、母の前に出て畏まる。
 『我等このたび、奉公をいたし、御恩蒙ひるべき身ではおざりませぬぞ、末代までの語り草に、富士の野の御狩の御供を思ひ立つておざります。それに就け』

て甚だ恐れ入つたる事ではおざりませぬぞ、御小袖一つ、貸してたまはりたう
 あざりますが、如何にておざりませうか』
 何氣なく母に語る。母は是を聞いて、

「ナニ、御狩への御供とな？御分の父河津殿が非命の御最後をば知るしめされでか奥野の狩の御歸途に、思ひもかけぬ仇矢に當つて失せ給ひつるを。止めね、止めね。馬鞍さへも見苦しうあるに、且は鎌倉殿の御憎しみもある伊東の孫、構へて然ることは思し立たれな。それも是も小袖惜しうて斯く申すではおざりませぬぞ。妾、皆御分のためを思へばこそ、止めるのでおざりますぞ」
 嘗ては最愛の夫祐泰を失へる母満江は、狩場のこと、し言へばたゞ一途に是を思ひ止まらせんとする。

十郎、一期の本懐を盡くさんは此の度の御狩にありと思ふ故、猶ほも言葉を盡して、その許されんことを乞ふ。

母も流石に否みがたく、さらば………とあつて是を許す。紋柄おもしろければとて、秋の野に、草盡し縫うたる練貫の小袖一つをたまはる。
 十郎畏つて、障子の内にて是を着換へ、亡き後の形身にと、己が小袖をば、其處に置く。

(四一) 母 の 許 し

外にあつたる五郎は、此の様子に我れにもあらで、思はず聲を掛ける、
 『五郎時致これにおざります。そも我等は誰人の子にておざりますか。あはれ願はくば、此の時致にも、召替の小袖一つ賜ひてよ』
 母は是を聞いて、暫しの間物も言はいであつたが、稍あつて、
 『誰ぞや來りて小袖一つと言ふなる。十郎には今取らせ、京の小次郎は奉公の者二の宮の女房は、又斯様に言ふべくもあらぬ。禪師法師とて乳のうちより捨て

し子は、叔父上、養育して越後にあり、箱王とて悪者のありしは、勘當して今に行方しれず。他に子とては、妾、持たね、何人でおざる』
 聲も荒く言ひ詰る。

五郎もとより思ひ切つたることなれば、

『その箱王こそ、參つておざれ』

茲ぞと答へる。

『そは誰人の許あつてぞ。母なる親とて侮つてぞか。不埒者め、七代までの不興なるに、對面など思も寄らぬわ』

思ひ期したることはいへ、母の怒りは、なか／＼に強い。

五郎小聲になつて、

『さらば是非おざりませぬ。我等、斯様の身に相成つて、重ねて申上ぐべきこと母上までは恐れおざる。そこな女房達よ、心あらば聞こし召せ。人の親の習ひ

盗みする子は憎からで、繩取る者を怨むとか。こは常の親の習にておぼるぞ』
暗にそれとなく述懐する。

母満江、斯くと聞いて、

『親とな思ひそ。母の言葉を重くもせで、返り言なすがごとき其方、早、失せよ』
ことごとく立腹する。

物をも言はで、此の時まで差し控へ居つたる十郎祐成、

『我等、兄弟數多おざりませれど、身の貧にてか、所々に別れ／＼に相成つておざります。中に唯あるものゝみ一人、我等に連れ添うておざりますほどに願はくば此の祐成を不便に思し召され、御慈悲を以て、御許し下されませ。殊には我等、さきにも申せしごとく、這度、富士野の狩くらに赴く身、なれど貧ゆる郎黨の一人とてもおざりませねば、あのものをこそ召具して行かんと、思ひ立つておざります。さはれあの者は母者人の御勘氣の身の上、御許しを蒙

らぬに於ては、我等も具しがたうおざります。あはれ、此の場にて御赦免な
下されませ』

搔口説いて、切に其の許を乞ふ。

なれど母の怒りは容易に解けぬ。

十郎、なほも言葉を盡くして、さま／＼に説きなす。

母は依然として、その心を翻へさぬ。

今は是非なしと、十郎乃ち表面に態と怒りを現はして、持つたる扇、サツとばかりに投げ捨てつ、

『さ、おざるに於ては生甲斐のなき此の者、今は有つても益おざりませぬ。とてものことに、母者人の御前にて、あの細首打ち落してなりと、御許を得るであらう。五郎、覺悟のせい』

言ふより早く突つ立ち上りざま、腰なる刀の柄に手を掛けて走り出でる。

母は流石に驚いて、思はず十郎の袖、しつかと握り、
 『ヤレ待つてよ十郎、物になど狂ふてか。如何に身貧にして、思ふこと叶はねば
 とて、なにしに現在の弟を手に掛くべきことやある。妾、それほど迄には思は
 ぬものを……………』

女は流石に心も弱い。十郎聞くより、

『然らば、御勘氣、御許し下されよ。我等も助くるでおざりまするに……………』

『いかにも……………御分に郎黨一人取らすと思ひて、さし許すほどに、御分も思
 ひ止まり召され』

母の心は、忽ちに折れる。

(四二) 別れの一曲

十郎飛び立つばかりに喜んで、

『許されてぞ、五郎。とくく此方へこそ参られよ』
 手を取つて、母の前に誘ひ入れる。

五郎は餘りの嬉しさに、ホロ／＼と男泣きに泣きながら、伏目がちに母を見て
 其場にガバと打ち伏す。

男となつてより以來、親しく逢ふのは、實に是が始めてある。

母は、熟々と五郎の様子を見て、直垂の衣紋、袴の付際、さては烏帽子の着やう
 なんと、宜うも斯くまで亡き父に似てけると、思へば思ふほど昔の偲ばるゝまゝ
 に、

『さても親子の仲ほど、哀れなものはおざらぬよ。斯くまでに成人せしとは露知
 らで、絶えて見ざりしことの淺ましき、憎うてはなきぞ、五郎。自儘に男に
 なりつるばかりに、心強くも勘當してけるにこそ……………』

泣き萎れし五郎の姿、たゞ無慚とのみ見て、是も其の場に泣き倒れる。居合は

すもの誰一人として、涙の袖を絞らぬはない。

やがて酒取り出させて、母は十郎祐成に盃を差す。祐成、飲んで是を五郎に差せば、時致三度干して、其の前に差し置く。

『三年が間の不興は、今ぞ許せし記に、此の盃、思ひ取りにするでおざらう。但し、親と師匠に盃さすは、必ず肴の添うものさか。當時鎌倉にては、秩父の六郎が今様、梶原の源太が横笛、名ありと聞く。なれど他人のことは見聞きもならね、御分は箱根にありし時、舞の上手と聞き及んでおざる。忘れずば、一とさし舞ひて見せられ』

母の言葉に、十郎、腰より横笛を取り出し、平調に音を取つて、

『いかにや五郎。母者人の御所望なるに舞ひては見せられぬか。一とさし舞はせられよ』

勸むるに五郎止むなく、時に取つての肴と、扇押つ取り押し開いて、聲高らかに、

に、謠ひつゝ舞ふ。

.....
君が代は千代に一度入る塵の

白雲かゝる山となるまで

.....
押し返し、三遍まで舞ひ、そのまゝ、調子を踏み替へて、

別れの殊更悲しさは

親の別れと子の歎き

夫婦の思ひと兄弟と

何れを分きて思ふべき

袖に餘れる忍び音を

返してやらむ關もがな

と二遍せめにぞ踏む。

母も流石に昔の思出られて、いと涙ぐまれるばかりである。

兄弟は涙を餘所目に舞ひを終へる。母は白の唐綾の小袖を取り出し来て五郎に與へる。

「十郎主は常の事なれば、常の小袖を参らせたれ、五郎は、たまさかの事なれば是を参らすでおざらう。但し狩場より戻られなば、必ず返しめされよ。御分等の小袖は、母が好しなに計らひ置くでおざれば……………」

など物惜しみすると思ひたまひそ。

兄者人十郎は、いつもく、小袖、帷子借ると言ひては、遂に返しめされし例おざらぬ。これは曾我殿の見知り給ふ小袖でおざるほどに、再び御見せ申さずば、又しても例の子供に取らせつるかと思はれんも、妾、心耻しうおざればこそ……………」

言はれて五郎は、件の小袖を押し戴きく、練貫の着古したると着換へて、心に思ふ遺品の替衣、いざ……………そばかりに一禮なして、決然兄もろともに其の座を立つ。

後見送つた母の満江は、

「過ぎにし頃十郎が、小袖を借りて再び見せぬは不審と思うたに、さても弟の五に與へてか。近き頃にも又大口の直垂取らせたに、それをも二度とは見せざつた道理、同じく五郎に與へてか。父には幼くして別れ、一人ある此の母には今が今まで不興ぜられて有るか無きかの世に泣ける彼れ。思へば哀れのものよ」
又しても涙は、止め度もなく落ちる。

(四三) 最後の首途

此方は十郎、五郎の兩人、母より賜はつた二枚の小袖をばかたみにとシと胸に

懐いて、

『嬉しとも嬉し。今こそ思ひ残すことはあらず』
と同じく是も亦、さめくくと泣く。

『さりながら悲しきは只今の御仰せ、小袖を返へせ、替りの小袖を調へ置くこの御事なれど、我等、今を限りに此の世に亡しと聞こし召されつらんには——何しに返せとは言ひつらん。神ならぬ身の悲しさよ——と御嘆きなされんこと必定おざります。生れて今に二十有餘年、養ひ育て給へる母者人の御恩は、いかで一日片時も忘れられ申すであざりませうや。我等、切めては萬分の一だに報い奉つらんこそ思へ、昨日までは御不興の身の上、御膝元にさへも侍すること叶はぬ仕儀であざつた故、今死に、行く身としては、逆ものことであざります。生きては母者人に御心を惱まし參らせ、死しては又も此上なき御嘆きを見せ參らす我等、思へばさても——不幸の極みであざりますよ』

道が鬼をも取り拉がん五郎時致も恩愛の情に迫つてはたゞホロリノと猶も落涙する。

『その悲しみは我等とても同じこと、所詮は無益であざらほども、はやく、一と筆書き残すの用意をいたされよ。門出の時刻に間もなうあざれば……』
兄は兄だけに、諦めも早く、泣き萎れる弟の五郎を勵ましたつ、慰さめつして、傍への硯箱取り寄せ、墨摺り流す。

五郎も泣くく、兄の言葉に涙を收めて、有り合ふ白紙を其處に取り出す。
兄弟遺書を認め了つて、今は思ひ置くこと更になしと、遂に涙を振つて、曾我の館を立ち出づる。まこと是ぞ親子が一世の別れ。

従ふ者ごては、たゞ鬼王、道三郎の兩人あるのみである。
既にして兄弟は箱根の山に達する。
『兄者人、我等此處を忍び出づる時、權現にも御暇申さず、又師の御坊にもそれ

と申さゞつたこと、今に至るまで、その恐れ、残り居るやう覺えておざります。願はくは今生にての名残りに、餘所ながら師の御坊へ御目にかゝりたく存じておざりますれば、あれに暫し立寄ること兄者人にも、御許し下されい』

五郎のいふ言葉に、十郎も、

『ごごわりでおざる。我等とても、聖經の一卷、陀羅尼の一遍なりとも師の御坊に授からば、後世の幸とも相成るでおざらうほどに、立寄り申すでおざらう』
馬を下りて別當の坊に繁ぎ、先づ権現の神前に詣で、最後の祈願を籠める。
やがて別當の坊に入れば、行實阿闍梨、慕し氣に自ら立ち出で、兄弟に對面する。

久々のことゝて、話はそれから夫へと、頃には盡くべもあらぬ。

(四四) 箱 根 の 暇 乞 ひ

稍あつて行實は言葉を変更して、さて兄弟に言ふ。

『殿原、斯くも打ち揃うて來ませしこそ幸ひなれ。愚僧、門出の餞別に、是れ參らするでおざらう。心置きなう御納めあれ』

寶藏より、大小の二刀、黒鞘卷の小刀と、共庫鎖の太刀とを取り出して來て、前者を十郎に、後者を五郎に與へる。

兄弟、さては既に悟られしかと、心の中に驚きながら、

『餞別とは怪しうな、如何なることおざりますか、我等一向に合點行かいでおざります』

さり氣なく言つて、何處までも一期の大事を隠さんとする。

行實聞くより怨めしの面持をして、

『怪しうなどは、殿原にも似合はぬ仰せ言、愚僧知らいでと思はれてはおざるが隠すより、隠されたりと思はずし、斯々の次第と、何故に御打ち明けはして下

さらぬぞ。始めより、左あらぬ體にこそ會釋したまふれ、笑ふうちに何處やら
ん打解くる態もなく、思ひ切り給へる御氣色、自然と面に表はれておざるを、
愚僧何とて見通すことおざらうや。殊には此の道に掛りめされしもの、これ權
現へ御暇をも申し、又愚僧にも逢ひて、後世を頼まん御心こそ推し奉れ、よ
も相違のいたすことおざるまい。なれやこそ愚僧も、首途の餞別として此の品
々を贈り参らすのでおざる。年だに若くんば、愚僧とても、何ぞ御頼に相成る
べきではおざるが、今は、なか／＼に思ひも寄らぬこと、切めては是なりと進
ぜるのでおざる。

此の太刀こそは、九郎判官義經が木曾追討として、上洛なしたまへる時、祈禱
のために、當權現へ御納めなされし由緒あるものでおざる。見知れる人もおざ
らうほどに、愚僧参らせたりとは、ゆめ御披露なしめされぞ。たゞ京の町にて
買ひしところ申されよ。心に望のある殿原なれば返す／＼も御短慮無用、萬を

忍んで宜き機會を待ちたまへ。
爛眼、炬の如く、美事に兄弟の圖星を指す。

十郎、五郎は返答もなさず、只、有難涙に掻き暮れるのみである。

別當は、漸て、明王の尊像を取つて、持佛堂に倒さまに懸ける。

『殿原兄弟が本意を遂げしと聞かぬうちは斯様にこそ置け、正しき位置には懸け
奉らじ』

珠敷サラ／＼と押し揉んで、ひたぶるに祈誓を籠める。

兄弟、今は大願の成就、疑ふべからずと、大いに喜んで、茲に厚く行實の情を
謝して、箱根を越える。

三島明神の前に到れば、時に將軍頼朝、今澤の狩くらを立つて、既に、浮島ヶ
原に向ひしと聞く。

『彼所こそは、實に、日本無双の名山、富士の高峯の麓なれ。いざ然らば屍を山

麓に曝して、名をば天下に輝かさんか。行けや五郎。來れや時致』
 とばかり、十郎の意氣は、見る／＼うちに昂がる。五郎とても、やはか劣るべき
 『言ふにや及ぶ。いざ、させたまへ』
 と是亦同じく、兄に従うて、驀然に乗り進む。
 既にして浮島ヶ原に到れば、國々より集れる數千騎の人々、花を折り、月を招
 ぐの粧ひ凝らして、我れこそ君の御威に預らんものをと、必死になつて、茲を先
 途と狩立て居る様子、兄弟、何とて躊躇ふべき、機會こそあれど、直ちに其の群
 れに入つて、祐經や居る、敵やあると、血眼になつて、探り求める。

(四五) 不運の兄弟

十郎その日の扮装は、萌黄匂ひの裏打つたる竹笠を戴き、群千鳥の直垂に、夏
 毛の行脛深くひつこうで、鷹うすべうの鹿矢、筈高に取つて付け、重籐の弓脇挾

んで、肌には母より賜はつたる小袖を着なし、具鞍置いたる駒に打ち跨つて、と
 ある薄の原中に身を潜めつ、屹と四邊に眼を配る。
 五郎は、それより少し離れし傍への丘の上に打ち上つて、馬を下り頭に引つ立
 てつゝ、敵や見ゆると、油断なく身構へる。
 肌には同じく母より賜はつたる白唐綾の小袖を着、上に早川の伯母より得たる
 からざいみに蝶を二つ三つ、所々に付けたる直垂を着し、紺の袴、秋毛の行脛、
 たぶやかに穿き下して、鶴の元白の征夫、筈高に負ひなし、二た所籐の弓の眞ん
 中おつ取り、鹿毛なる駒に打ち跨り居る。
 折柄、遙か彼方に三頭の鹿、勢子を破つて走り來るを、射て取らんものと、浮
 線綾の直垂に、大斑の行脛、切符の矢を負ひ、吹寄籐の弓握りなして、金砂の裏
 うつたる竹笠を吹く風に靡かせつゝ、追ひ懸け來つた一人の騎馬武者がある。
 丘なる五郎、是を誰ぞと見やるに、さても嬉しや、武者は是ぞ正しく敵の祐經